

名を記し、又二三寸隔て、先方の宛名をかき、其左に脇がきすべし。たゞし脇がきは、先方の人の身分により、多少の差あり。もし貴人ならば、御許人へ又は人々申給へなどかくべし。長上へは、御前に、同輩へは、御もとに、などすべし。

卷方は、状袋に入るゝ時は、かき仕舞の方より表を中へ巻込み、袋を用ひぬ時は、表を上にしてかき始めの方よりまくべし。袋なきには、名宛を上にして裏の方へ一寸許り巻きかへして切り、上より一寸餘の所へ切れ目を入れ、其所より下を裏へ折るかへして、上の残りたる所にて封をすべし。

状袋の上には、先方の宛名をかき、裏には我名を下の方にかくなり。但し先方の尊卑によりて、様の字の認方に差あるべし。又郵便にて送る時は、双方の住所番地など何れも、名の右の方

注意

注意

但し細字にして、名宛よりは下へ過ぎざる様にすべし。郵券は、表の方名宛の左に、上の方二分程あけてはるを適當とす。外國への書翰には、宛名の右の方の上にはるべし。婚姻の時の手紙は、返しがきをすべからず。其文中もすべてかへし言葉をいむなり。

吊問の手紙も、右に同じく返しがきをせず、又双方の安否をかくべからず。

人へ何事か依頼し、其返事を要するには、返戻の郵券を手紙中へ封じ込みて遣すべし。はがきなれば、往復を用ひてよし。但し先方の人の身分によりては、中々無禮となることあれば、其人と場合とにより見合すべし。

又はかきにとくしき双方の安否などかくは、ふさはしからず、端書を以て使用する程の場合ならば、其要事のみをかくをよしとす。

### 移住の心得

家を賣買するに心得べきことあり、先づ賣買の相談決して、其引渡す日は、すべて諸道具など前日に引取り、室内は勿論、庭前門の内外にいたる迄清潔に掃除して、其家の第一とすべき客室の床に、目出度書畫の掛物をかけ、熨斗、蛇の三方を其前に据ゑ、床の下座の方に樽肴を置きて、引渡すを禮とすれども、畧するには、掛物の前に鯛など臺にのせて置くもよし、折には此作法を知らずして、掃除もなさで引渡すことなどは、あまりに心得なき業なりかし。

### 移住の心得

但し其家を買ひたる人あるひはこの建物を壊ち、又は貸家を業とする如きは、此の作法にも及ばざるべし。又人の家をかりて住みたるをあけ渡すも、掛物を残すに及ばず。

### 新築の移住心得

### 新築の移住心得

新しく家を造りてこれに移住するには、先づ掃除、其外の事終りて、竈、井戸へ洗ひ、米鹽酒を備へ、客室の床(別に神殿をふべし)に桐の白木にて八足臺を造りて置き、其上に洗ひ、米、糠を土器に盛り、酒は瓶子にいれ、二重の餅など各三方に据ゑて備ふべし。猶此外に、山畑、野川、海の鳥魚菜など備ふると備へざるは、身分によりて計らふべし。これ其家久しく火水の災なからむ爲、氏神を祭るの心なり。桐にて新に入足臺を造るは、此木火水に入り

て損せざるものなれば、其縁起を祝ひてなり。  
又其日親族朋友を招きて、祝賀の宴をなすは勿論、其饗の獻立には、焼物を煮びたしとして向詰に用ふべし。其他の調理中、すべて付焼てり焼など一切焼きて用ふる物ははぶくべし。

得 服装の心

服装の心得

衣服は、寒暑をふせぐ爲の物なれば、決して華麗を好みて驕るべからず。又、猥に流行にのみはやるべからずといへども、また服装には必ず作法ありて、其作法に従がはざる時は、禮儀をかく事あるべし。されば禮服を始め、訪問散步旅行吊問とも、四季折々其身分に従ひ、世の風俗に適する様心かくべし。  
今こゝに服装の大畧をいへば、かしこき御あたりの事はさて置き、中等社會の人々も、昔は其身分によりて、禮服に用ふる

其地質模様などにも、差別ありしものなれども、維新の後はずべて風俗一變して、大抵高位の方に於ては、禮服といへば、外國風の服装を用ひ給ふ事となりたるなり。故に普通の紋附などは、常服の如くなりぬれど、猶中等の人に於ては、いまだ外國の風にも改め難き場合なれば、先づ紋附を以て假りに禮服とし、左に其區別をあぐ。  
大禮には、黒羽二重の紋附に、白小袖一枚、二枚、時候に應じて重ね、襦袢も白きを用ふべし。模様は、其人の年齢によりて計らふべきなり。  
上着の地質は、縮緬を用ふる人あれども、大禮に用ふる黒の紋附は、羽二重を本儀とす。又縮緬は最も他の色に適當なり。  
今猶昔の禮服を婚姻の時などに用ふる人、往々あり。昔の禮服

には前にもものべし如く、地質によりて、其模様のさまも差あり。左にかゝげて参考に供ふ。

綸子は其色赤黒白にして、其模様の付けかた立涌幸菱などに四季の花など取合せ、鹿の子をいれて染めたるに、縫箔したるものにして、模様は稍々大形なり。

縮緬は色各種にして、其模様には、あるひは謠の句をかたどり、又は源氏の中よりとりて、御幸小督住吉詣明石鷹狩など種々あり、何れも縫箔したるものなり。其の始めは縮緬絹、大暑には麻布の細き地質の晒又は縮を以て、色模様右に同じくし、白き重ねをつけて用ひしものなり。もし今猶昔の風俗を好む人は、用ふるも差支なし。冬は緋紋縮緬又は緋綸子などの小袖に白を重ね帯付としてその上に前の綸子又は縮緬の模様を搔取

として着ることなり。白き小袖は時候によりて二枚又は一枚重ねてよし。但し紅色の搔取を用ふる時は、合着は白紋縮緬か、又は白地の細模様など見計らひてよし。

帯は紋付の上へは、普通の巾なる縹珍縹子など、其色模様も着物と取合せて用ふべし。合着の時の帯は巾六寸位にして、縹子縮緬など縫箔したるか又は染模様などにして、和らかきを用ふ。但し搔取下の帯は嫁したる人は前に結び、處女は後に結ぶを本儀とす。昔は平常も夫人は帯を前にしたることもあるなり。

中禮は色替りの紋付地質を論ぜず、白小袖を重ね、又は同色を二枚三枚重ねて用ふるもよし。襦袢の衿は必ず白を用ふべし。小禮には同じく二枚重ねの紋付、又は小紋の紋付をも用ふ。襦

神の衿は、白ならずとも、色薄き縮緬など用ふべし。何れも帯は丸帯を要す。但し博多などにて縞ある帯は、禮服にはふさはしからず。

平常の訪問又は散歩などは、縞小紋隨意たるべし。帯は打合せたるを用ひて差支なし。又下着を重ねるには、上着と同じ裏を揃へて用ふべし。羽織を用ふることあるも、こは畧服なれば、もし尊長の方へ訪問したる時は、玄關にてこれをぬぐを禮とす。旅行の衣服を新しく造る人は、身分によりては、有合の衣服のうち、地質つよきをえらみて用ひてよし。もし新にこれを作らば、其色も華麗ならずして、丈夫なる地質を以てすべし。帯は和らかなるを要す。又冬着を用ふる頃なれば、コートを着るをよ

しとす。

吊間には、なるべく黒みたる目だゝぬ服を用ふべし。葬儀靈祭法事などは、尤禮服を用ふることはいふ迄もなきことなれど、すべて色模様とも華美なるを見合せて用ひざるものとす。平常家にある時の服も、身分相當にすべきは、勿論なれども、垢染みたるをば用ふべからず。假令其地質のあしきも、清潔を旨として、折目整しく着なすべし。衣服の不清潔は、人へ對して無禮なるものなり。

懷中物

懷中物

近き頃は、新古入り交りて、折には昔さまの大禮服に用ひたりしは、こせこなどいへる物を、通常の服に用ふる人往々あり。是等は、幕府時代の服裝の規定にて、今は廢れたるとなれば、差支

なしといへども猶ふさはしからず見ゆるものなり。すべて何事も新古折衷する時は、よくその元を知りて後ち用ふるをよしとす。當時の服には、又相當の懷中物もあれば、其取合せよく見計らひて用ふべし。

注意

注意

近き頃は藝妓などの風俗より移りて、白小袖に綾綸子など用ふる人あれど、中々いやしく見ゆるものなり。白小袖は白羽二重を本儀とす。故に袷衣、單衣などの禮服に、白き重ねを用ふるにも、白羽二重又は白き絹を以てすべし。絹又は明石縮緬などの薄き禮服には、上等の麻布の晒を以て重ねてよし。折には絹に絹を重ね、又は練などを用ふる人あれど、中々に上臈めきてふさはしからぬものなり。

振袖の下に用ふる襦袢の袖を上着と同じ丈にして着る人あり。これらも藝妓などより風俗移りたるものと知るべし。襦袢は肌着なれば、其袖長くとも六尺縫ひあがり位にて造りてよし。

帯の結び様は、若くとも嫁したる人は、太鼓に結び、娘の中は「堅」やの字にすべし。但し、いまだ嫁せずとも、十八年以上にもなりたる人は、「堅」やの字も似合はざれば、太鼓の如くして、片輪を少し引出して結ぶべし。これを「ロカウ」やの字と俗にいひ習はしたれど、正しき名稱にもあらざんめり。

進物の心得

進物の心得

凡そ進物には、場合によりて差あることは勿論なれども、如何なる場合にも、其品質に心を用ひざれば、或ひは其人に對し不

相當にして、セツかくの進物もはえなきことあり。又平常折にふれての進物にも、人より到來したる品にして、日數へたるなどは中々贈らざるにもおとることあるものなり。又大なる箱の中に少しの物をいれたるなど、其人の心のうちも、おし計られてすさまじく覺ゆるなり。又病氣見舞の品は殊に注意して、病人の口に相當すべく、又病人の目を慰むる如きをえらぶべし。あるひは病人の氣をあしくする如き品名なるは用ふべからず。又病氣重くして食物一切進まざる場合には、看護の人々の方へ相當の物を贈るべし。

火災などの時の進物は、なるべく其儘食すべき物を見たて、餅饅頭果實類又は煮焼して重詰にしたる物など贈るべし。衣類調度も、焼失したる如き方へは、これに相當の日用品衣類など

添ふるをよしとす。

吊問の進物は、神葬佛葬によりて相當の品を見たててよし。神葬の方へは、鳥魚餅菓子果實其外榭料など贈り、佛葬なれば餅菓子果實のたぐひ、又は香木蠟燭なども用ふ。何れも花を供ふるを第一の供養なりといふ。

注意

注意

すべて進物には、紙にて包むと包まざるとあり。昔は其品により包み方も差ありしものなれど、當時にては余程の大禮の進物にあらざれば折形など用ひざるととなりたり。故に何品も白紙二枚にて包み、上がきして、水引をかけてよし。

又水引に各種あり、紅白・金銀・金赤・赤白・黒白・黄白などなり。紅の水引は、公家に専ら用ふるなり。金銀は結納の熨斗匏包、又

は婚姻の如き祝賀に用ふ。普通は赤白金赤なり。紅は結びて右の方、金銀は金を右とす。金赤赤白何れも赤き方右なり。平常は何れも折掛に結び、婚禮には引結びなり。手重き進物なれば、引結びたる先き老の波なり。

吊間の進物には、黒白の水引本儀なり。黄白をも用ふることあり。何れも白き方左なり。

又紙にて包みがたき品は、盆あるひは臺に紙二枚を敷くべし。祝賀平常とも紙は二枚、吊間には一枚にすべし。

熨斗匏包は、祝賀其外表だちたる進物には、白紙を以て折るべし。平常は色模様ある紙を用ひて差支なし。

吊間の時は、昆布を以て熨斗匏に代用す。包み方普通の通りにして、白紙を用ひ、水引は引結びなり。

進物の器  
物返し様

進物の器物返し様

人より物を贈られたる時、其小蓋など返すには、白紙二枚を折りて入れおくべし。但し土地により、白紙を用ひず、熨斗匏包をいれ置くもあり。これらは時々、の風俗又は土地の習慣に従ひてよし。

又風呂敷にて包み封印などつけたるには、其封をとき押印ある所のみを切りて、小紙に包み、其上に其封印とかきて、器物の中へ入れ置くを禮とす。又紙にて包まざるも封印のときたるは、器物の中へいれてかへすものなり。

帛紗あるときは、其裏面を出して、畳み、器物の中へ入れおくべし。

ひきで物  
の事

引出物の事



進物持來る使の者へは相當の引出物を與ふるを例とす。祝賀の進物には金子を包みて與ふべし。金の多少は身分相當にすべし。平常の進物には其使ひの人により手拭又は紙などのたぐひ、女なれば化粧の物など遣すべし。但しあまり輕少なる進物のときは引出なくとも差支なし。又自ら持ち來たる進物は假令召使を供ひ來たるとも引出物には及ばざるなり。吊間の時はすべて引出を與へず、又器物の中へも白紙熨斗包など入れざるを法とす。

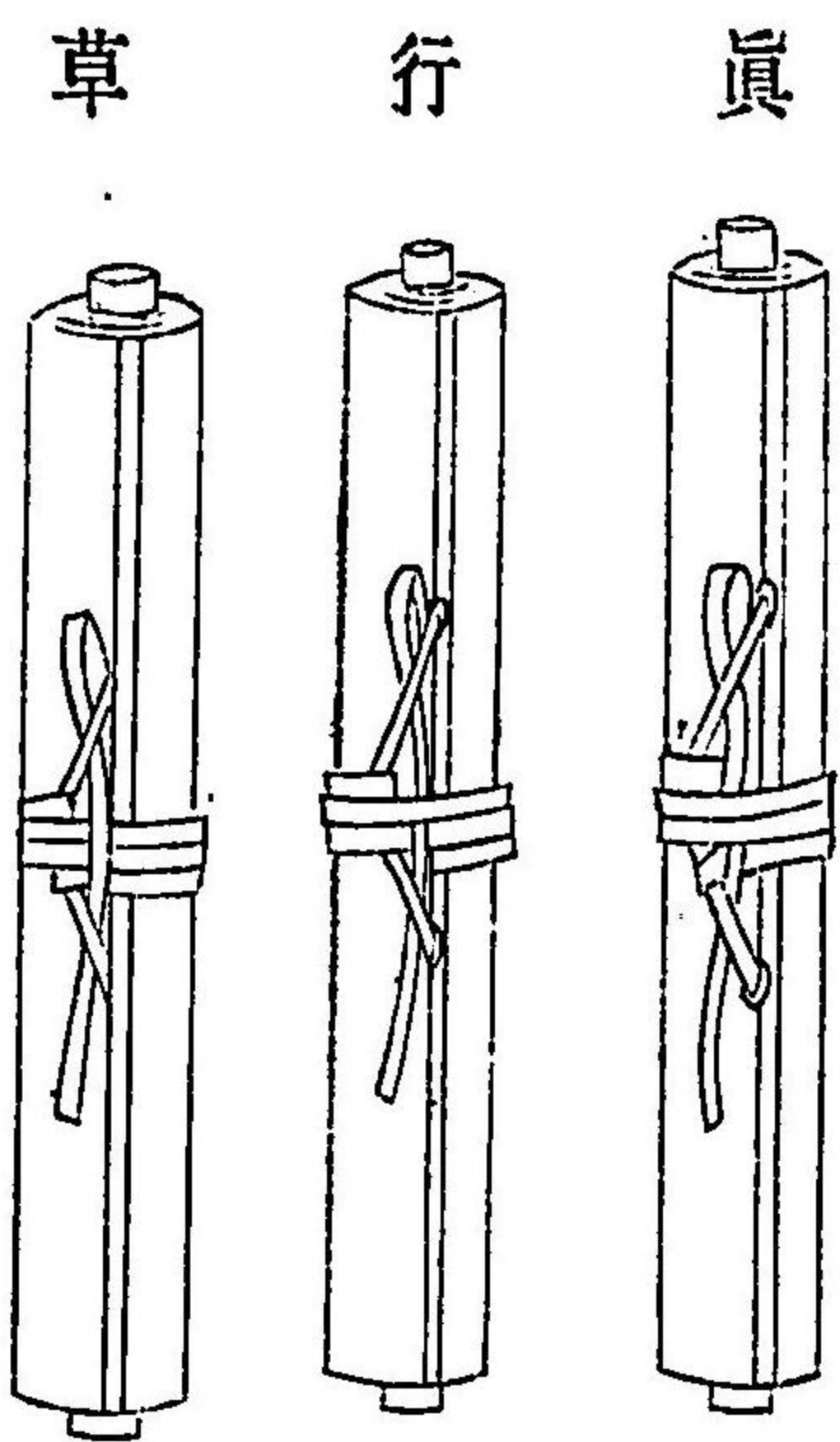
饗筵裝置の心得

饗筵裝置の心得

掛物の事

掛物の表具に眞行草あり。眞の表装は一文字の所より四方金

色の小縁を取巡しにしたるをいふ。行の表装はたゞ金色の小縁を取りたるばかりなり。草の表装は小縁なくして、左右とも縁せまくとりたるものなり。また左右とも縁廣くとりたるは行にも草にも通ひて用ふることを得るなり。又紐の卷様にも眞行草あり、但し當時は其中最手がるきを心得置きて事たれり。猶参考の爲、左に圖をかゝぐ。



猶此外流儀により、種々卷様にも差あり。

床筋の事

床筋の事

又掛物の天より二筋下りたるものを風帯といひ、其風帯の先きに白き糸にて左右へ小なる總の如き物、これを露といふ。  
床筋にも眞行草あれど、さまで必用ならざれば、畧して左に裝飾の場合により、心得べき事をあぐ。

平常

平常

人を招待するには、殊に掛物其外に心を用ふるは勿論なれども、心ある男客などある時は、有名なる人の古書畫など用ふべし。又夫人を上客とする場合には、なるべく女の目に感ずべきやうの美麗なる畫などえらぶをよしとす。卓上の置き物其他もすべてこれに應じてえらみ、取合に注意すべきなり。

普通の祝

普通の祝賀

何にてもめでたき書畫の對幅など用ひてよし。祝賀の裝飾に、あまり文人めきたる様の畫は、見合せてはぶくべし。置物其他もすべて縁起あしきたぐひは、用ひざるをよしとす。

婚禮

婚禮

婚禮の裝飾は、其式の輕重によりて、あるひは床に二尊の神供など筋ることあれど、當時は先づ三幅對又は二幅對などの掛物を用ひ、畫の質は、高砂又は松竹梅あるひは和合神などよし。其他置物なども、めでたき性質模様など見計らふべし。

活花

活花

婚禮の裝飾の活花には、なるべく常磐の物を用ふべし。花なれば、梅・菊・又万年青をも適當とす。其外の花も用ひて差支なしといへども、朝顔又は紫陽花などはいむなり。

普通の祝賀の時も、右に同じといへども、蓮の外は何花を用ふるもくるしからず。但しなるべく、めでたき物をえらぶべし。平常には、如何なる花も差支なし。但し鶏冠花は用ひざるものなり。

大禮の場合には、卓を真中にして、活花一對同じ花瓶に活けて、左右に置くべし。中禮又は普通の時は、花一瓶とするも差支なし。

棚飴

棚飴

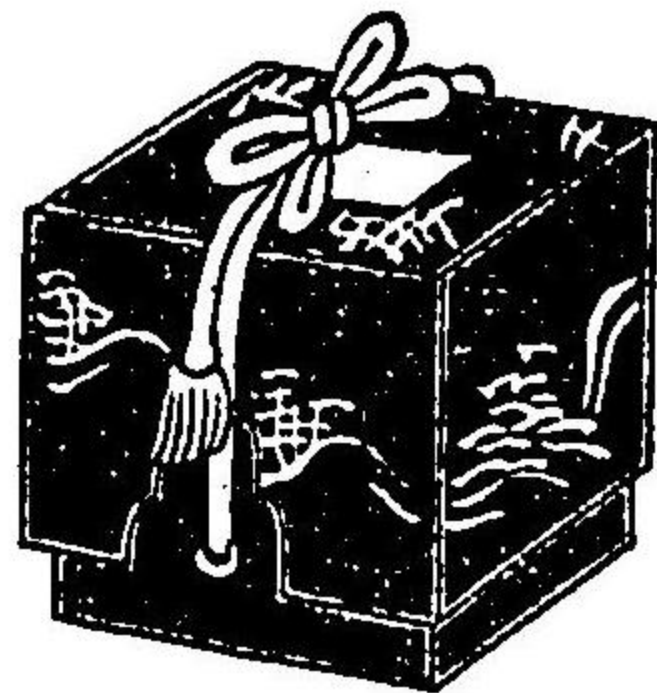
棚の飴り様は、實踐作法の部にのべたる如し。すべて床の上なると、同種類の重ならざる様取合せべし。左に床及び棚飴の圖の一例をかゝぐといへども、此圖に限るものにあらず。

又棚飴に用ふべき物は、其數あげて數へがたし。左に大畧をかゝぐ。猶如何なる品をも、其場に應じ、見計らひ取合せよく飴りてよし。

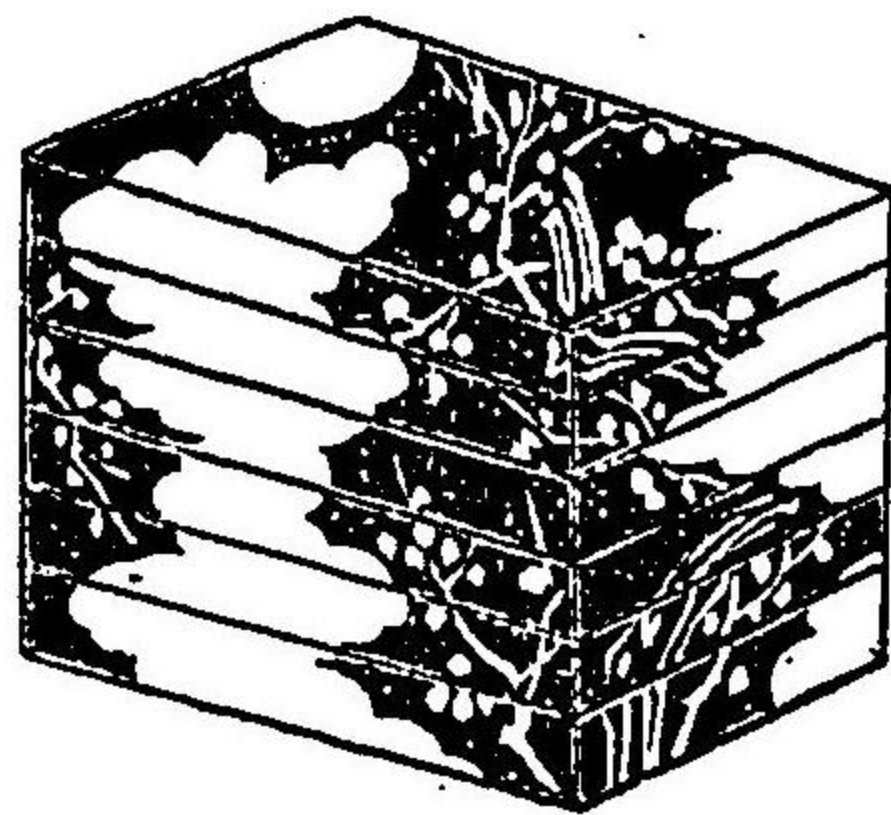
珍石



箱たるか

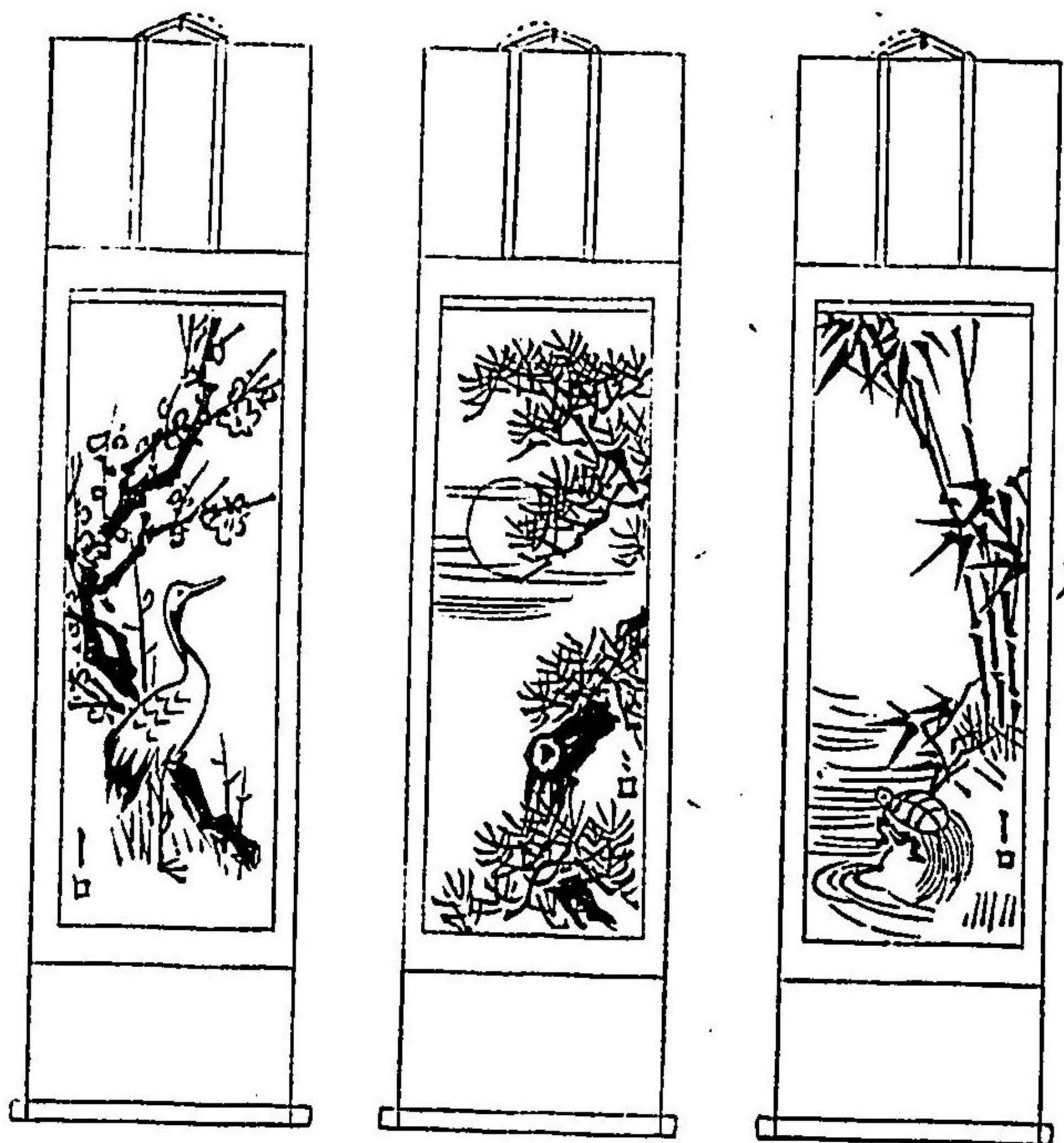


箱硯重



對 床 飭 三 幅

新撰女禮監 後編 心得の部



礎

床 飭 三 幅 對

活花

卓上  
香爐

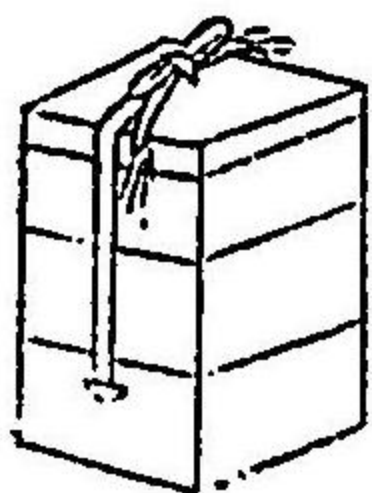
活花

床

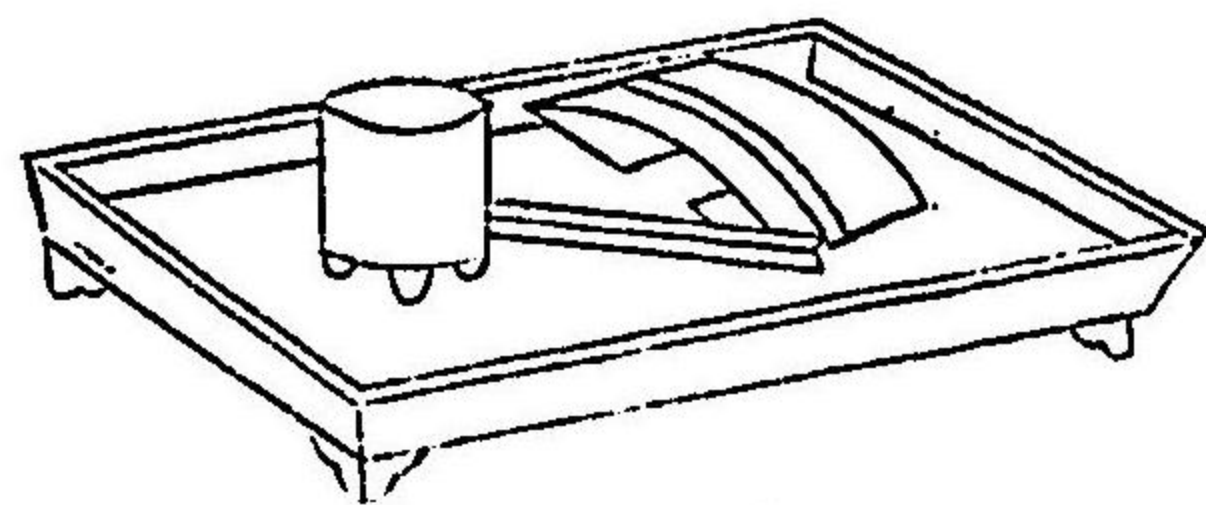
縁 床

二二五

香籠

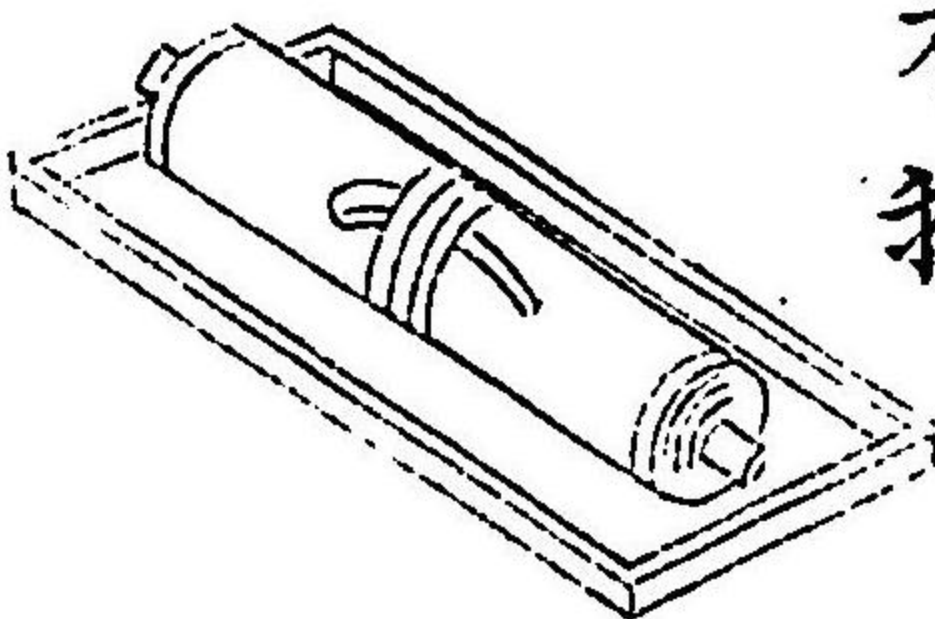


香の具



新撰女禮監 後編 心得の部

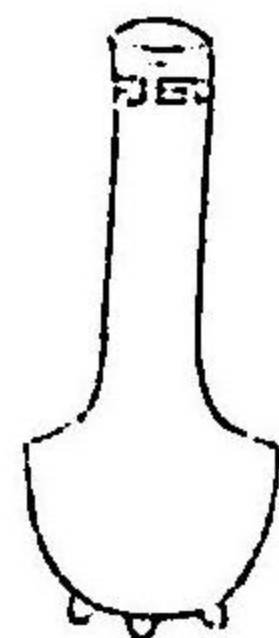
卷物



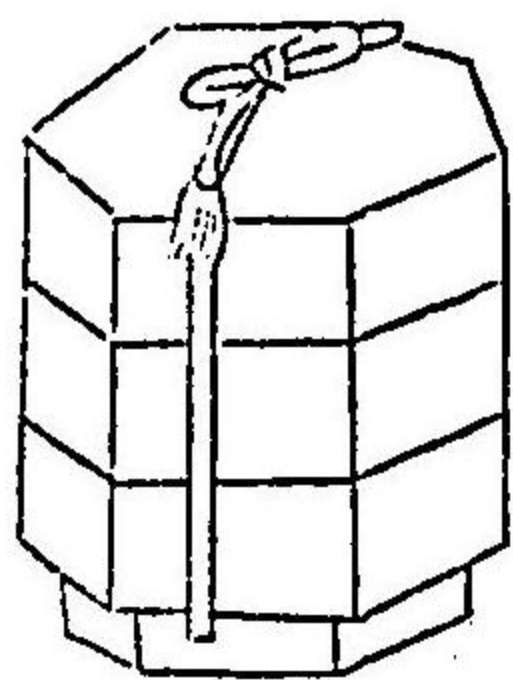
一輪活



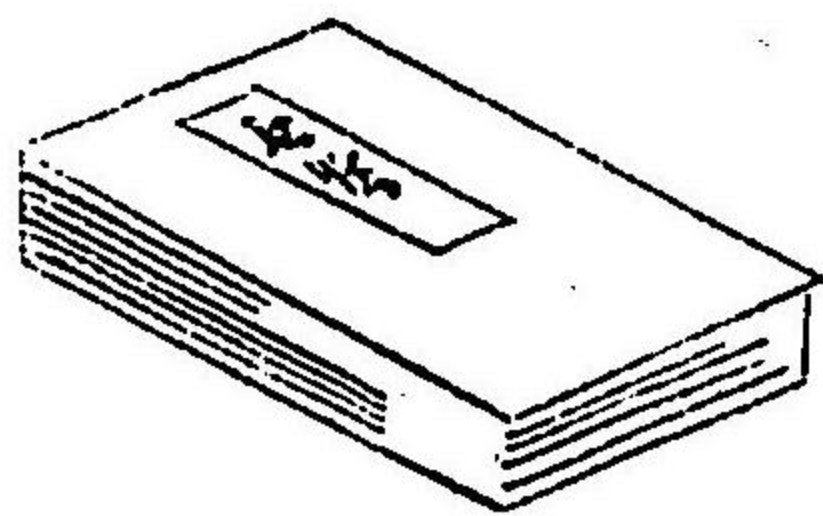
置物



食籠

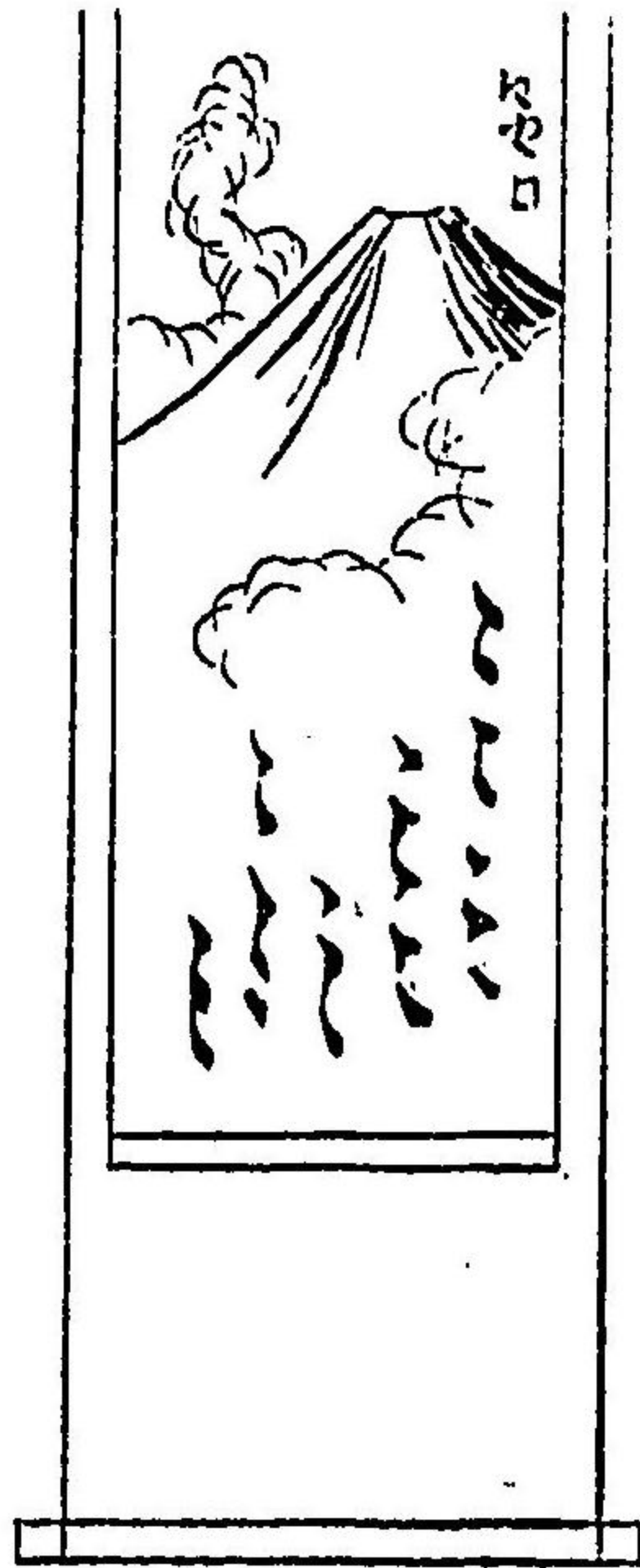


画帖



二二四

掛物一幅



掛物一幅

新撰女禮監 後編 心得の部

活花

卓

縁床

掛物二幅



掛物二幅

新撰女禮監 後編 心得の部

壁

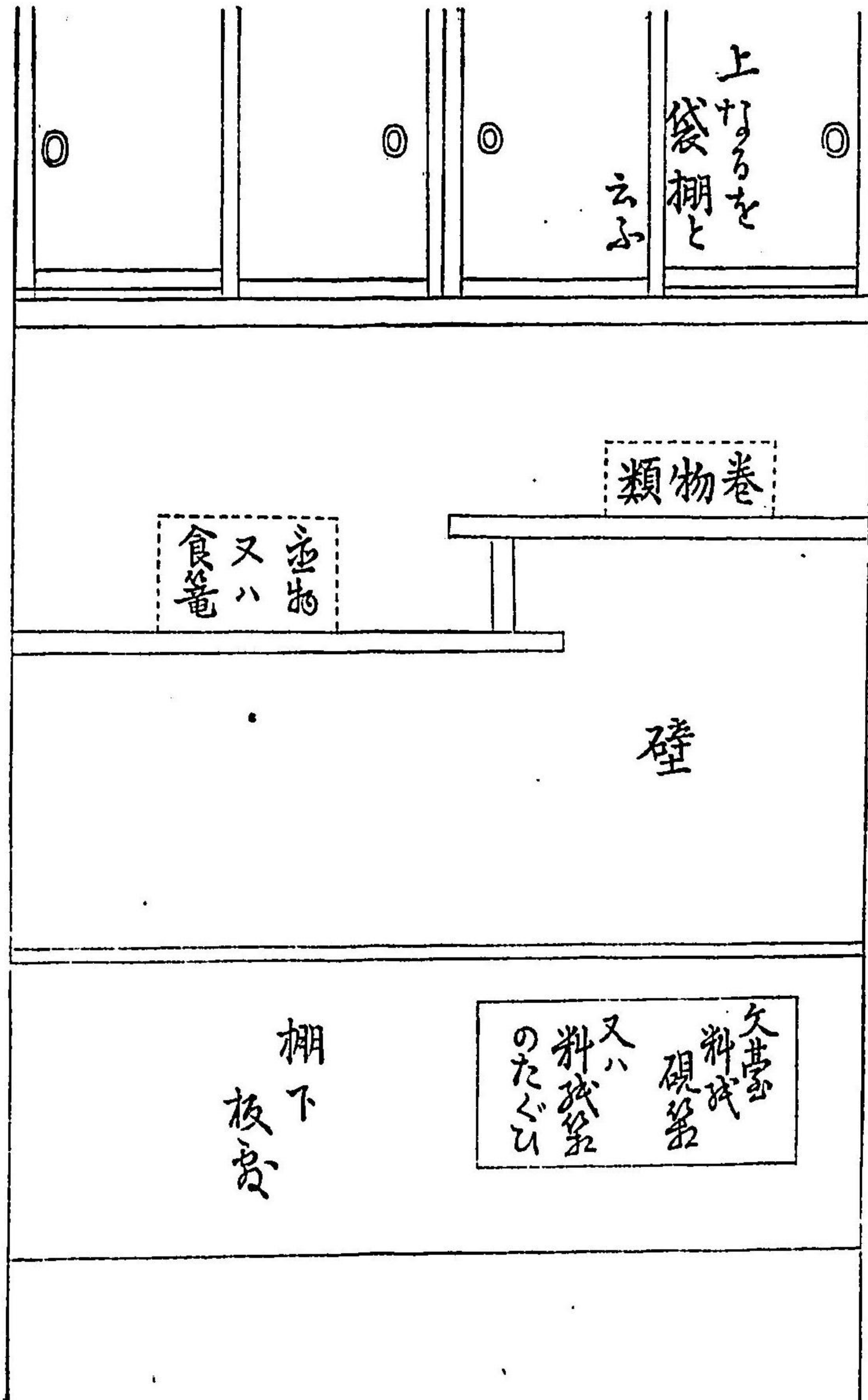
床

香卓

活花

料紙  
箱上  
硯箱

縁床

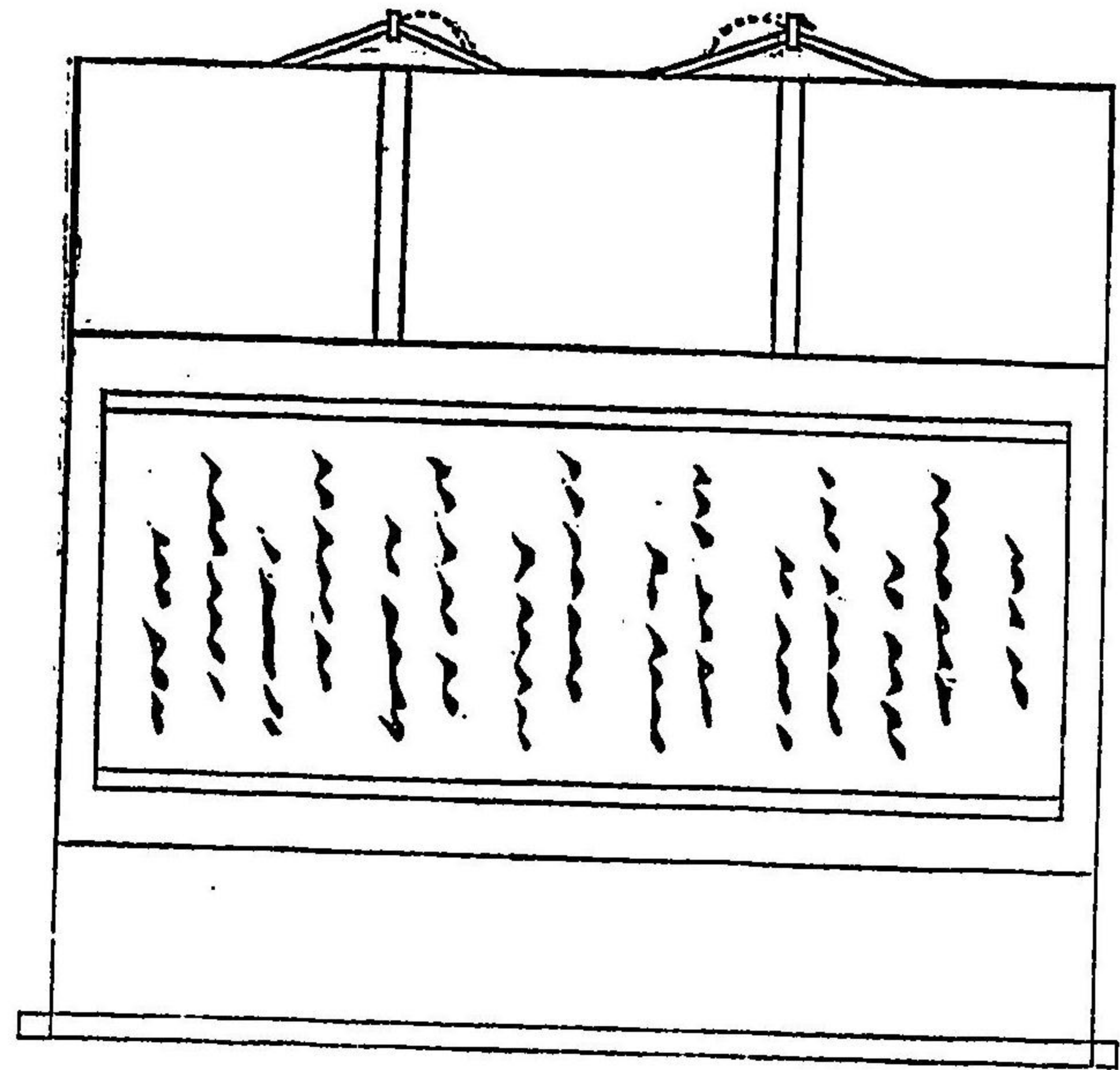


棚

棚

横物

横物

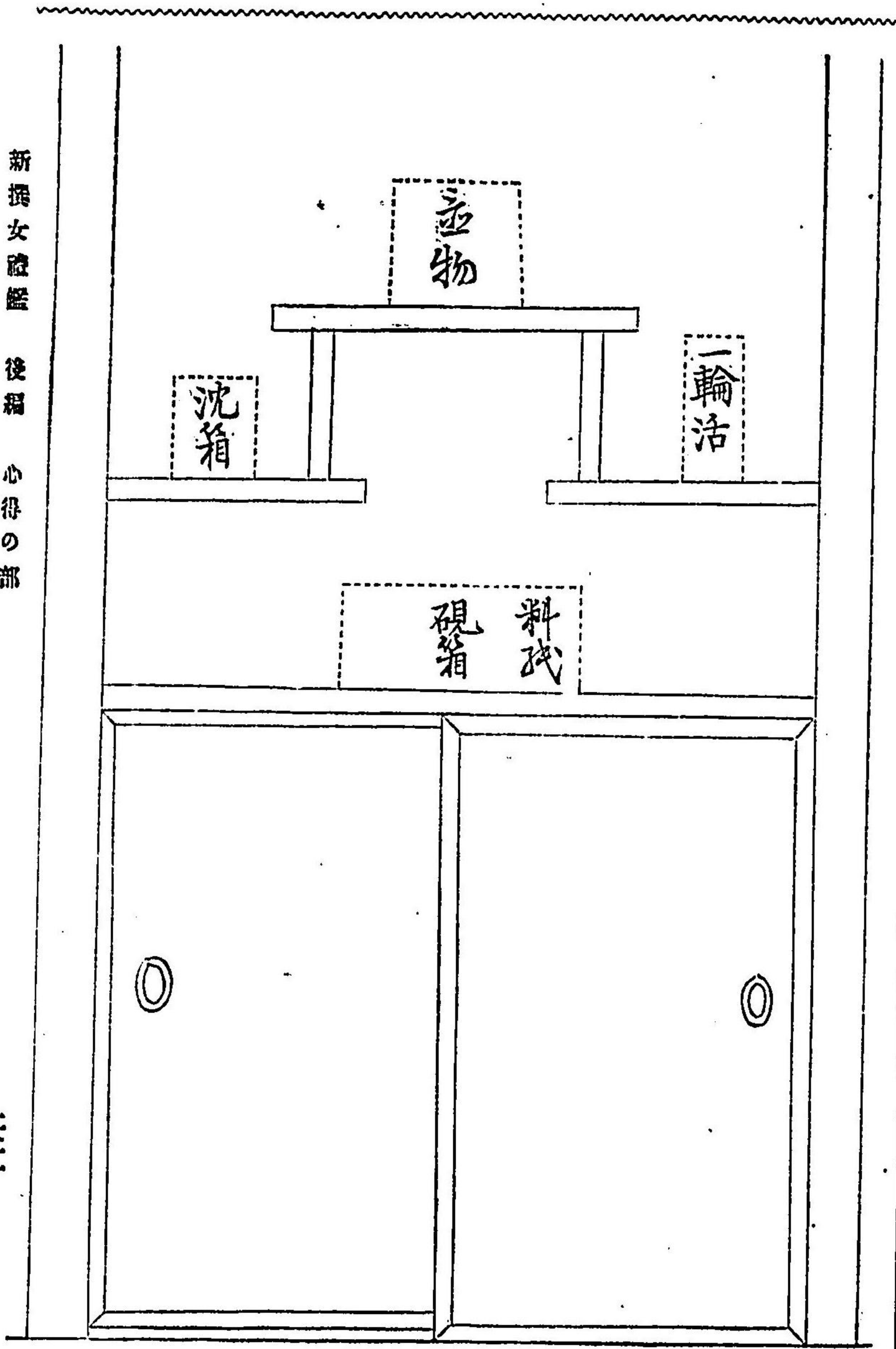
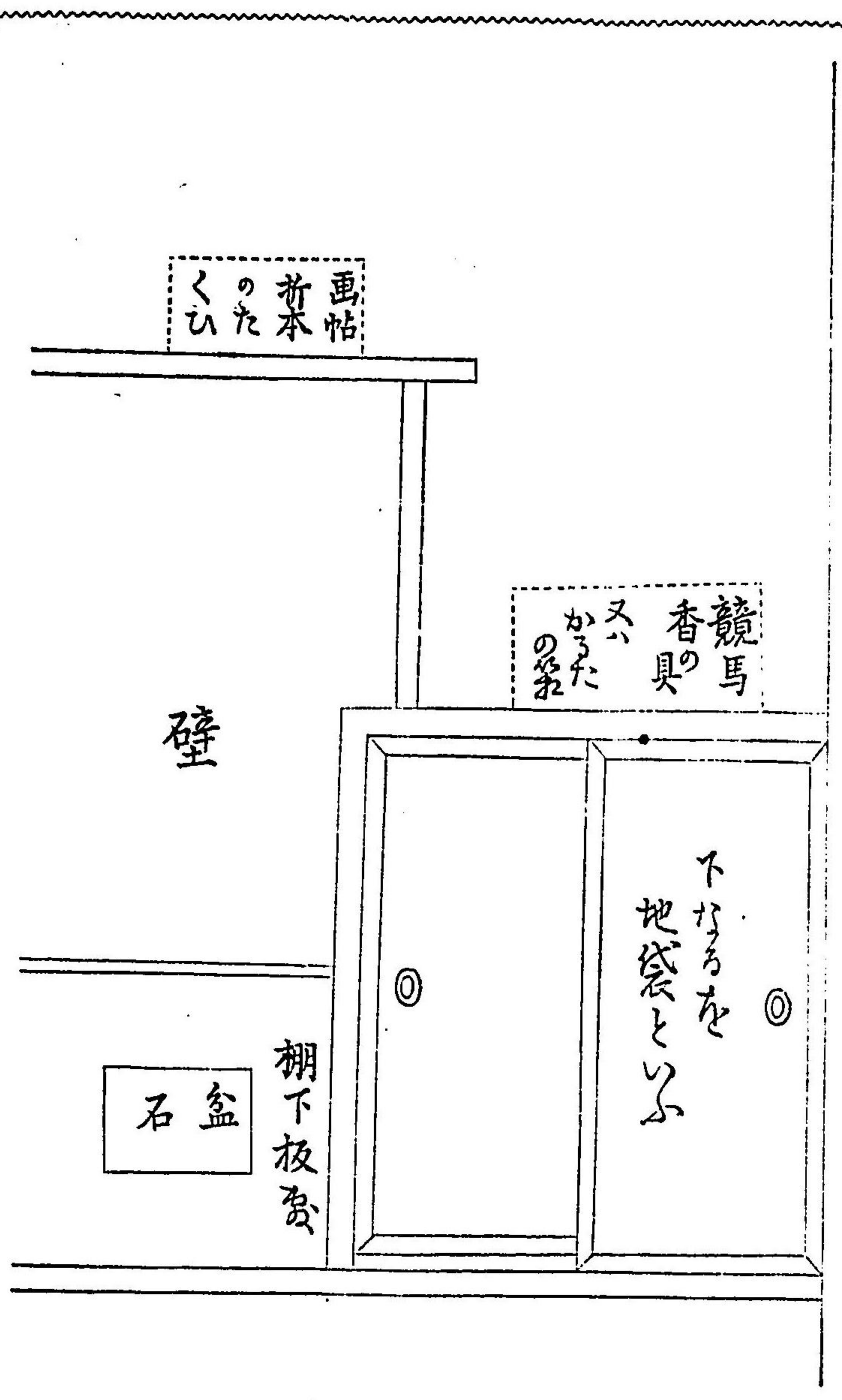


壁

床

又ハ  
料紙  
硯箱

縁床



饗應の膳部の事

凡そ人を招きて饗するには、其宴の輕重により、多少の差あり。昔は上流の方々にては、三汁十一菜などのちたき膳部を調へたるものなれど、近き頃は、何事もことそぎて行ふ事となりたれば、則ち實踐の部にも、一汁三菜より二汁五菜迄に止めたりき。

膳部は、なるべく清潔にして取揃へ、其持出づるに至りては、殊に塵などかゝらざる様注意すべし。

飯は始め椀の中へ一杓子許りいれ置き、汁其外の物はよき程に盛り、膳に雫など落ちざる様にし、箸は右の方膳の縁によせかけておくものなり。其他はすべて實踐の部の如し。

給仕の心得

給仕は髪衣服とも清潔にして、坐作周旋すべて貞靜にし、末座に扣へ居て、始終客の氣合を見計らひ、飯汁の替りを薦むるにも餘りに強ふるに過ぎず、又たらざるなく、程よくすべし。飯は多く盛るべからず、酒を薦むるにも、男客女客の差あるべし。又客酒を好まざるも一獻のみにて止むべからず、酒は三獻を法とす。但し男客へは此限りにあらず。

給仕は客の前へ至りては、すべて體を低くして物を取扱ふべし。替りの物を薦むるにも、客の食物におのが息のかゝらざる様心得べきことなり。

客多數ありて、二三人にて給仕するには、其受持を定めて、一人は飯一人は汁の替りを薦むる様に、其進退程見計らひ、早きに過ぎず、又遅からざるやうつとむべし。



主人の注意

主人の注意

給仕人順次客へ膳を薦むる間は、前後見計らひ、これを指示し、  
 焼物を薦めたる後末座へ進み出で、客一統へ龕末ながら箸を  
 取られんことをのべて禮すべし。近き頃は主人も同席して陪  
 食すること流行せり。假令陪食するも、客一統へ膳部を薦め前  
 のごとく禮を行ひて後末座につくべし。食事中も客の程を見  
 計らひ、時々給仕人を指示して、客へ對して禮儀をあつくすべ  
 し。

中酒出でなば、又座を立ちて客へ向ひ、盃をとられんことをの  
 べて、禮を行ひ、客一統盃を取りたる頃、おのが座につくべし。  
 客より主人へ盃をさすことあらば、一禮してこれを飲み終へ、  
 程見計らひ、盃を懷紙にてぬぐひ、座を立ちて客の前へ至り、返

盃去て一獻薦め、時宜を計りて退くべし。

當時は中酒を畧して、本膳の前に吸物にて酒を出し、酒終りて  
 後ち本膳と引替へにする事流行せり。假令薦め様は前後する  
 も、すべて心得方はかはることなし。本膳を引く前にも、主人主  
 婦は座を離れて客に向ひ、龕末不行届なりしことをのべて、禮  
 すべし。

もし客貴人なる時は、主人主婦は自ら本膳を持ち出で、薦  
 め其他は給仕に任するも、又焼物は主人薦めて禮を行ふべ  
 し。

中酒も又右に同じ。場合によりては、酌をもなし、取肴も扱みて  
 參らすべし。

時の流行よりいへば、酒の席には必ず盃洗あり、主人主婦客の

前に至り、自身酌をとり、客の盃を給はらむとを乞ふべし。さて客より給はりし盃は、酒を飲終へ、盃洗の中にてこれを洗ひ、返盃して、順次二三の客へ及ぶべし。もし其場に盃洗なき時は、懐紙にて盃をぬぐひ、盃臺もなき時は、懐紙の疊みたる上へ盃をのせて、返盃するをよしとす。

客の心得

客の心得

膳に向ひては、飯碗の蓋より取始むる事及び食ひ様は、すべて前編に示せるが如し。凡そ主人より禮ある時は、一膝後へ退きて、叮嚀に答禮すべし。食事中は、なるべく貞靜にして、左右を見るべからず。食品の中もしおのが好まざる物あらば、蓋を取りたる儘、何氣なく箸をつげざるをよしとすれども、すべて主人の心を盡し調理したる食物なれば、なるべくこれを食ひ、其調

理の叮嚀を謝して禮あるべし。但し食事中、舌音齒音などせざる様に注意し、又食品を食ひ残すことあるも、之を碗又は皿の中に亂れざる様にして置くべし。酒を薦められなば、假令好まざるも、先づ一二獻はこれをうけ、飲残りたる酒は、時宜を計りて汁椀などの蓋に下捨てよし。主人出で、盃をうけんと乞はれなば、會釋して我盃を懐紙を出してぬぐひ、臺又は懐紙の疊みたる上へおのせて出し、酒を注ぎて參らすべし。もし其場に盃洗あらば、其中にて盃を濯ぎてよし。最後本膳を引く前に、主人主婦より禮あるべし。其時客は少し後へ退き、其日の饗の叮嚀なりしとを謝して禮すべし。食事後も程よく談話し、時宜を見計らひていとまを乞ふものなり。

注意

注意

近頃の風俗は、客の膳部に食ひ残したる食物を重箱又は杉折などに詰めて持ち歸る事流行せり。故に客を招待する方にては、杉折など取揃へ置き、客の膳部を引きて食残りを詰めて贈るを禮儀の如く思へる人あり。されど、これらは料理店などの風俗より移りたるものなれば、正しき事にあらずれども、假に其習慣に従ふも差支なし。但し客の箸をつけざる物のみを參らすべし。

昔は祝賀の饗には、焼物ばかり持歸へりしものなりき。焼物は饗の要とするものにして、且大てい箸をつけざるがゆゑなり。

又貴人の前にて頂戴する食物は、假令食ひ残したるも、これを持ちかへるを禮とす。これ頂戴の品なればなり。

獻立の注

獻立の注意

客を招きて饗する時の獻立は、其組合せの法ありて、昔はこれを庖刀家の任としたり。又禮法の家に於ても、其大畧を心得たるものなり。

凡そ何れの地方にても、客を招待するには、其最主とする客に相當すべき様注意あるべし。殊に老人などある時は、なるべく和らかなる物をも取交せて組合すべし。又獻立をなすにも、四季ともに魚菜其外に差あることなれば、其頃最も珍らしきをえらぶことを要す。

又獻立の組合せに注意すべきは、同色同形の物なり。假令其味に差あるも、同色同形は風情なきものなり。又形色ともに同じからざるも、其味の同じきもあれば、よく注意せざるべからず。

又昔と今と其取合せ方も、多少の差あるべし。すべて禮法も時代によりて移り變るが如く、食物も亦時の流行に従ひて折衷すべきことなり。ひたぶるに古風を以てするときは、或は若き人の口に合ひがたく、又其食品の名稱をも知らざるものあるべし。今左に獻立の一例をあげて、参考に備へんとす。但し春夏秋冬に別つべきなれども、四季ともに烏魚菜に差あることは人も知ることなれば、其時々に合わせて組合することを得べし。故に略してたゞ一例のみをかゝぐ。

畧式獻立の一例

一汁三菜

本膳

畧式獻立の一例

一汁三菜

繪

鱈細作り  
白髪大こん  
きくらげ  
青海苔  
きんかん

汁

鰹かまぼこ  
塩柴たけ  
二葉菜

煮物

角鶏卵  
すだれ麩  
芹

飯

香の物

鹽漬茄子

向詰

小鯛一塩焼  
芽せうが

吸物

たて貝  
泡雪鶏卵  
板わらび

取肴

かまぼこ  
鮑煮付  
申銀杏  
かう茸  
巻海苔

菓子

芳野饅頭  
二色羊かん

茶  
綾の森

後菓子

紅白落鴈  
松葉糖  
卷有平

薄茶  
別儀

一汁五菜

一汁五菜

本膳

鱈  
椎藍 油 花わさび  
うど 菊 芽  
ひらめ 作り

汁

結びさより  
松露  
青海苔

猪口

いり鶏卵  
きくらげ  
ぎんなんげ

飯

香の物

味噌漬  
大こん  
瓜

引落し

煮物

海老すり身  
むすび干瓢  
京菜

中皿

鱈子付  
海そうめん  
花わさび  
小猪口いり酒

焼物

若狹鯛

吸物

鯉筒切  
たれ味噌  
かき 柚

重引

鱈小申焼  
巻鶏卵  
板くるみ  
蓮根のり卷  
松葉松露

酒

菓子

長生餅  
きみ饅頭

茶

祝の代

後菓子

四季の花  
かたくり製  
せんべい

薄茶

上別儀

二汁五菜

二汁五菜

本膳

鱈

鯛の作り  
きんしゆば  
糸打大こん  
きくらげ  
ばうふ

汁

橘や  
貝割  
菜根き

壺椀

小鳥たき  
長いも  
しよ露  
葛引  
生姜

飯

香の物

奈良漬瓜

二の膳

煮物

甘鯛すりて  
あさだね入  
薄だし汁  
ふきのとう

二の汁

あか貝  
扇子大根  
絞り生姜

焼物

鹽鯛

中皿

鮎雀やき  
日光なんばん

吸物

鯉のこくしやう  
花 柚

重引

小坂かまぼこ  
海老花やき  
今ゆびし  
煮付けくるみ  
果實のるゐ

酒

菓子

千歳饅頭  
小倉羊かん

茶

前に同じ

後菓子

有平糖  
常盤せんべい  
松竹梅

茶

前に同じ

右は時節に拘はらず其大暑を示したるものなり例へば春は  
鱒を以て調理するも秋に至れば鮭にかへ夏は鮎を以てする

も秋冬に至りては鮒など用ひ鳥類も亦時の珍物を以てすべ  
し。

菓子も又四季ともに其時に相當すべき形をえらぶをよしと  
す。例へば大暑の頃芳野餅福梅初霜などはふさはしからず又  
春の頃小倉饅頭吹ふきよせなども右に同じ。夏はなるべく涼  
しげなるを取合せ又腐敗しやすき食物を調理すべからず。  
又佛法を信ずる家にては佛事の時の調理をも大畧心得ざる  
べからず。左に又一例をあげて示さむ。

精進料理獻立の一例

一汁三菜

本膳

精進料理  
獻立の  
一例  
一汁三菜

向皿

葛 糸 椎  
き ゆ き  
り ば り  
す み そ

汁

橘 豆 腐  
し ば た け  
二 葉 菜

煮物

長 い も  
結 び 昆 布  
し め ち 茸

飯

香の物

瓜 一 鹽 漬

皿

椎 だ た け  
す だ れ 鉄  
花 ひ り う づ  
京 梅 ぼ し  
菜

吸物

ゆ り ね  
板 わ ら び  
針 生 姜

取肴

ゆ び し 餅  
蓮 び し  
平 た け

菓子

忍 ぶ 饅 頭  
ぎ う ひ 餅

茶

の 森

後菓子

三 輪 の 里  
千 鳥 落 雁  
ふ き よ せ

茶

廣 葉

一汁五菜

一汁五菜

本膳

白 瀧 とう ぶ  
青 の び り  
わ さ び  
二 は ら ず

汁

芳 野 芋  
笹 午 房  
た れ み そ



猪口 煮 梅

飯

香の物 白瓜かす漬

引落し

煮物

かやくゆば  
葛あひんば  
わさび

中皿

こけらざし  
生 蕨  
椎茸  
蓮根  
淺草のり  
生姜

大皿

どろし揚  
やきふ  
岸梅ぼし

吸物

くわのせんべい  
つまみ菜  
針生姜

重引

百合露根  
松わらび  
板わらび  
ひじき  
葛引生姜

酒

菓子

焼饅頭  
半羊かん

茶

前に同じ

後菓子

松風糖  
有平巻  
すみれせんべい

茶

前に同じ

二汁五菜

本膳

向皿

白髪海苔  
蓮根細切  
金糸ゆば  
すみそ

汁

結び豆腐  
鹽松露  
貝割菜

壺椀

柚味噌

飯

香の物

茄子麴漬

二の膳

煮物

氷どうふ  
長芋摺あん  
花わさび

二の汁

橘あけ  
松葉牛蒡  
すり生姜  
すまし

猪口

慈にんじん姑  
胡麻あへ  
玉わられ

大皿

島田ゆば  
生蕨  
椎茸  
京菜  
梅ぼし

吸物

あわ雪芋  
松露もどき  
梅だし  
清汁

重引

揚物せんべい  
花こんぶ  
牛蒡  
長いも  
落し大豆

菓子

どりへ野餅  
錦羊かん

茶

前に同じ

後菓子

時雨の山  
松の葉  
氷糖

茶

別儀

右大畧かくの如し。精進の時は、焼物の代りに大皿盛を出だすことなれども、獻立の都合にて皿ならずとも、茶碗盛など用ふるもよし。何れも何汁何菜とする時は、本汁は常の味噌汁とし、二の汁は白味噌のこくしやう、又は落とし味噌など用ひ、吸物は清汁とするが如く、其調理同じからざる様工夫すべし。猪口は壺へ物又は酢の物など取合せ、壺碗と同じからざる様にすべし。又猪口を用ひず、中皿盛又は小鉢など、其時の都合により、見計らふべきことなり。

煮物は平碗に盛るを普通とす。重き儀式なる時は、杉箱とて小なる杉の折に足の付きたるを用ふることもあるなり。

菓子茶とも再度出すを本儀とすれども、當時の風俗よりいへば、あまりことごとくしければ、始めに蒸菓子にて點茶を薦め、次に干菓子にて煎茶を用ふるもよし。又一汁三菜などの畧式には、後菓子を畧して果實など出し、最後紅茶など用ふる方よし。又夏などは、果實に氷を添ふるなど、すべて其時と客とによりて計らふをよしとす。

結婚の事

結婚の事

婚姻は人間一生の大禮なれば、最も重んずべき事なり。さて婚の字を用ふるとは、古き書に嫁を娶るに、必ず婚時を以てす云々などあるが故なり。これによりて昔は必ず昏時に引移りし習はしなりしが、世の風俗につれて、當時は、其時刻も随意になりたるなり。

又婚姻を姻嫁とも嫁繼ともかけり。これ子孫をまうけて其の

家を繼ぐべき所以なりとぞ。されば婦を娶るは、先祖よりの血統を繼がしめ、其家を整理せむ爲なれば、よく其任に適るべき體質才徳をえらぶべき事なるを、猥りに容貌を問ふ人あるこそおろかなれ。

また下さまにては自由結婚などいひて、父母の命をもまたず、直接の談合により娶る事往々あり。これらはあるまじき事に、假令都合により直ぐに相談するとも、必ず父母の許しを得て、後相當の媒酌をもたのみ、身分相當に式をあぐべき事なり。結婚の作法のうち、我國にては、先づ結婚引移り三日の祝ひを重んず。昔は其式作法もいとちたき事多かりしものなれど、當時の風俗は何事もことそぎて行ふ事流行すれば、左に其畧式の一二例をあけて示さむ。

結納

結納

結納とは、双方縁談と、のひたる其徴として、男の方より女へ贈物をするをいふ。外國にては、指環を以てその徴とし、漢土にては納徴といひて相當の徴をいふとぞ。我が國にても身分の高低によりて、其贈物に差ひはあれど、結納の徴をいれて祝ふを禮とす。

先づ中等の風俗にては、女へ小袖帶端物などに、樽肴を添へ、其父母へも端物綿など贈るを例とす。

又これを一等畧すれば、女へ帶地樽肴を贈り、其父母へは贈らざる事もあるなり。猶一層畧するには、あるひは帶地料として金子に酒肴を添ふるもくるしからず。何れも身分によりて計らふべし。

結納の贈物には、目錄を添へなるべく、年長けて物なれたる人を使とすべし。もし其贈物多き時は、釣臺にのせて上覆をかくるなり。

使者は縁女の方へ至り、口上を述べ、目錄を添へて、徴納の物を取次へ渡す。取次これを縁女の父母へ報じ、使者を假に應接所へ通し、茶菓を薦め置き、其間に結納の物を別の客室へ双べ父母先づ着座のうへ、使者をこれに案内して對面し、吸物酒を薦め、相當の引出物あるべし。但し縁女は、其席へ出でざるものとす。縁女方よりは、結納をうけ、其答禮として、別に使者を遣し、樽肴を贈るを例とす。

折には、結納を女の方よりも、種々贈る事と心得る人あれど、こは大なるひがことなり。結納は、男より女の方へ、其家の整理、其外の事をたのみつかはすの徴なれば、納徴ともいふなり。されば女の方にてはこれを受け、其日親族集りて祝ふを法とす。男方にも女の方より答禮に贈りし樽肴を以て祝ふといへども、結納は女の方を重しとす。

又ある地方にて、結納に贈る小袖を迎ひ小袖といふ。これ其衣服を着て、引移るが故なりとぞ。但しこは正しきことにあらずといへども、又其意適へりともいひつべし。

又結納の贈物は、何れも折形したる紙に包み、水引は引結びて老の波なり。小袖は紙に包みがたければ、臺の上に紙を敷きて其上に飭るべし。臺は何れも白木の足打なり。樽の手は包みて水引をかけ、これも臺を用ふ。

結納の贈物には、眞の熨斗匏包または眞行の熨斗匏包を用ふ。

べし。目録は横の方古風にして本儀なれども、近頃の風俗に従ひ、堅目録をよしとす。但し横目録には重ねを用ひ、堅目録は一枚なり。左に目録の認め方及び贈物の圖をかゝげて其一例を示さむ。

小そで	一重
ちび	二筋
こんぶ	一折
さかな	一折
たる	一荷
以上	

ちりめん	二卷
ちび地	二卷
わた	十把
するめ	一折
たる	一荷
以上	

ちび地	二卷
わた	三把
こんぶ	一折
しほ鯛	一折
たる	一荷
以上	

濡わた	三把
さむら	一折
たる	一荷
以上	

御羽二重	一端
壽るめ	五連
たる	一荷
以上	

もくろく	一箱
御あぶぎ	一箱
こんぶ	二把
茶	二袋
しほ鯛	一折
たる	一荷
以上	

そく海久  
かたけ久

目録  
某破へ

そく海久  
かたけ久

目録はかな交りにてかくべし。又樽を家内喜多留などかくは、俗より始まりたる事にて、正しき作法にはあらざれども、時の流行に従ふも差支なし。

又結納目録は、男より女へ贈る品なれども、小袖帯などにはかるき御の字を用ひ引移り後は御の字を用ひずといふこともあれど、こも亦土地の風俗に従ひてよし。

横目録は三つに折り、堅目録は紙の大小にもよるといへども、大抵一寸七八分程の巾にまくべし。何れも上包みをして上がきすべし。又畧して上包みをせざる時は、始めに目録と かきてよし。

鯛の事

鯛を臺につむには、臺の上に紙を敷き、鯛の頭を人の向ふにし

鳥類の事

て、手前の方へ段々につむべし。又數多き時は、頭を人の左にして、横向きに右の方へつむ事もあるなり。

鳥類の事

鴨、雉子何れも用ふ。鴈は結納婚姻に用ふべからずといへども、又秋は來鴈なれば、用ひて差支なしといふ事もあり。

右何れも鳥は腹を仰向にして、頭を双方より合せて、羽の間へ置くべし。

魚の事

魚の事

魚二尾のときは、腹合せにして、入文字形に双べてよし。數あるには、何れも腹を左向にしてつむべし。

扇子の事

扇子の事

扇子は、末廣といふより、祝賀の進物に用ふるなり。金銀の地紙

にして二握箱入にし、白木の臺に据うるを正式とす。但し都合によりては、一握宛折形したる紙に包みて臺にのするもよし。

昆布の事

昆布の事

昆布を俗に「よろこぶ」ともいひ、又「ひるめ」ともいふより、祝賀に用ふることなれり。之を臺につむには、縁の方を中へ折込みよき程重ねて端物の如く巻きて、其上を昆布の細くたちたるを以て結ぶなり。さてかくよろひたるをば、五把七把都合によりて双べ、臺には紙を敷くべし。

小袖の事

小袖の事

小袖は身分によりて、一重より五重までなり。但し四季ともに綿入を用ふるを法とす。上着は身分により差ありといへども、先づ普通の人にては、染模様の紋付に白小袖を重ねてよし。但

し色模様ともめでたきをえらぶべし。

又如何程暑すとも、小袖一枚は贈らざるものなり。重ねを用ひざる程ならば、端物を贈るか、又小袖代として金子を贈るべし。小袖を臺につむには、二重の時は、上がへを上にし、袖を其上に折りて右の方へ据ゑ、今一枚は下がへを上にして、袖も右の如く折りかへし、左右より向ひ合せになる様にすべし。一重のときは、上がへを上にし、前のごとく、袖を折りかへしてよし。又二重以上あるには、何れも上がへを上にして、袖を折りかへし、二つに折りて、左より右へ段々につむべし。

帯の事

帯の事

帯は紙にて包み、水引をかけ、臺の上に双べてよし。一筋の時も同じく臺の中程に据ゑてよし。



端物卷絹類の事

帯の包み形は、奉書杉原何れにても横に綴合せて折るべし。水引の結様は、中頃、菊結、梅結など用ひし人もありしが、こは中古にたゞ何となく華美に流れて工夫したるものなり。故にたゞ引結びて老の波をかけてよし。

端物卷絹類の事

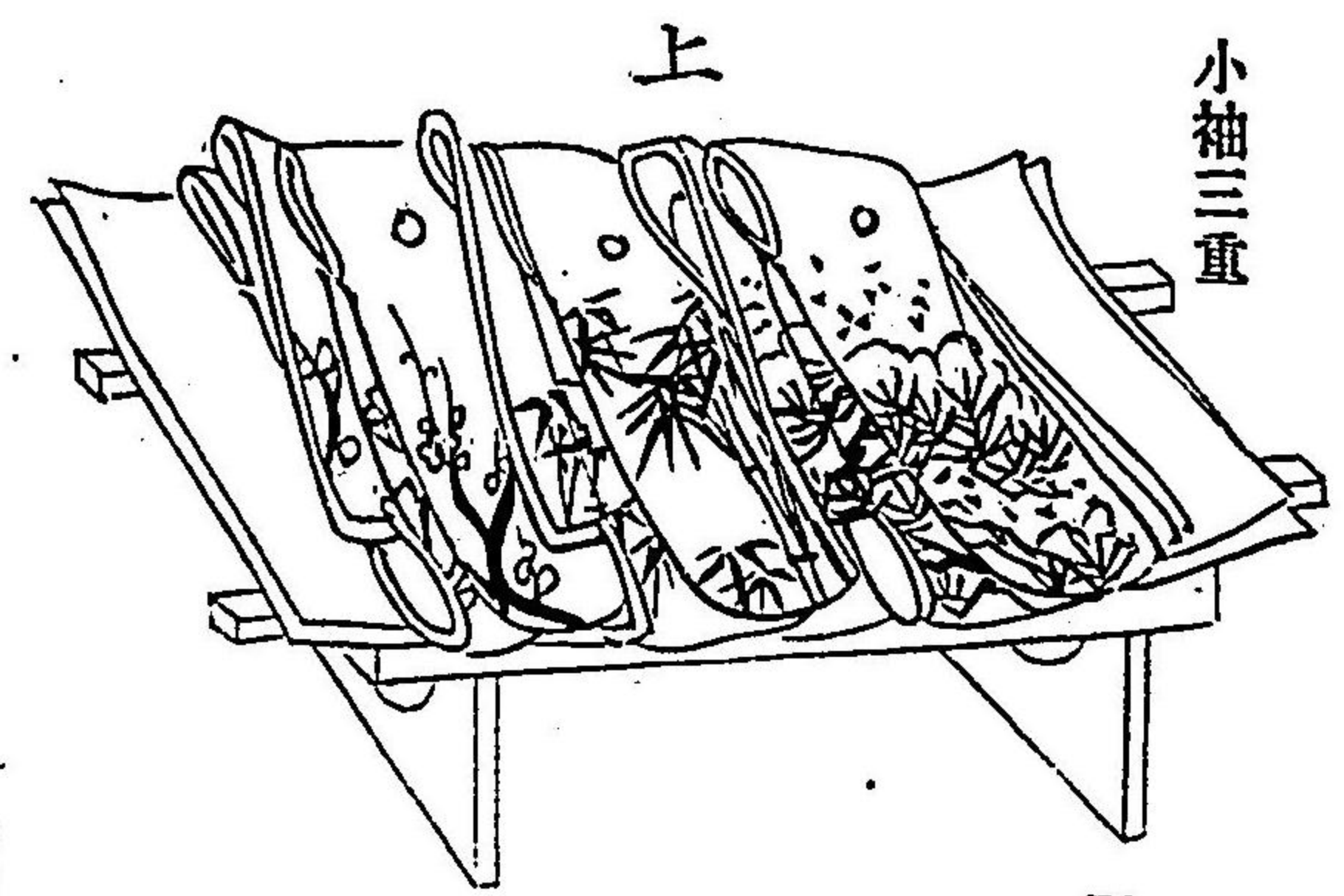
何れも作法實踐の部にかゝげし折形にて包み、水引は引結びて老の波なり。

綿の事

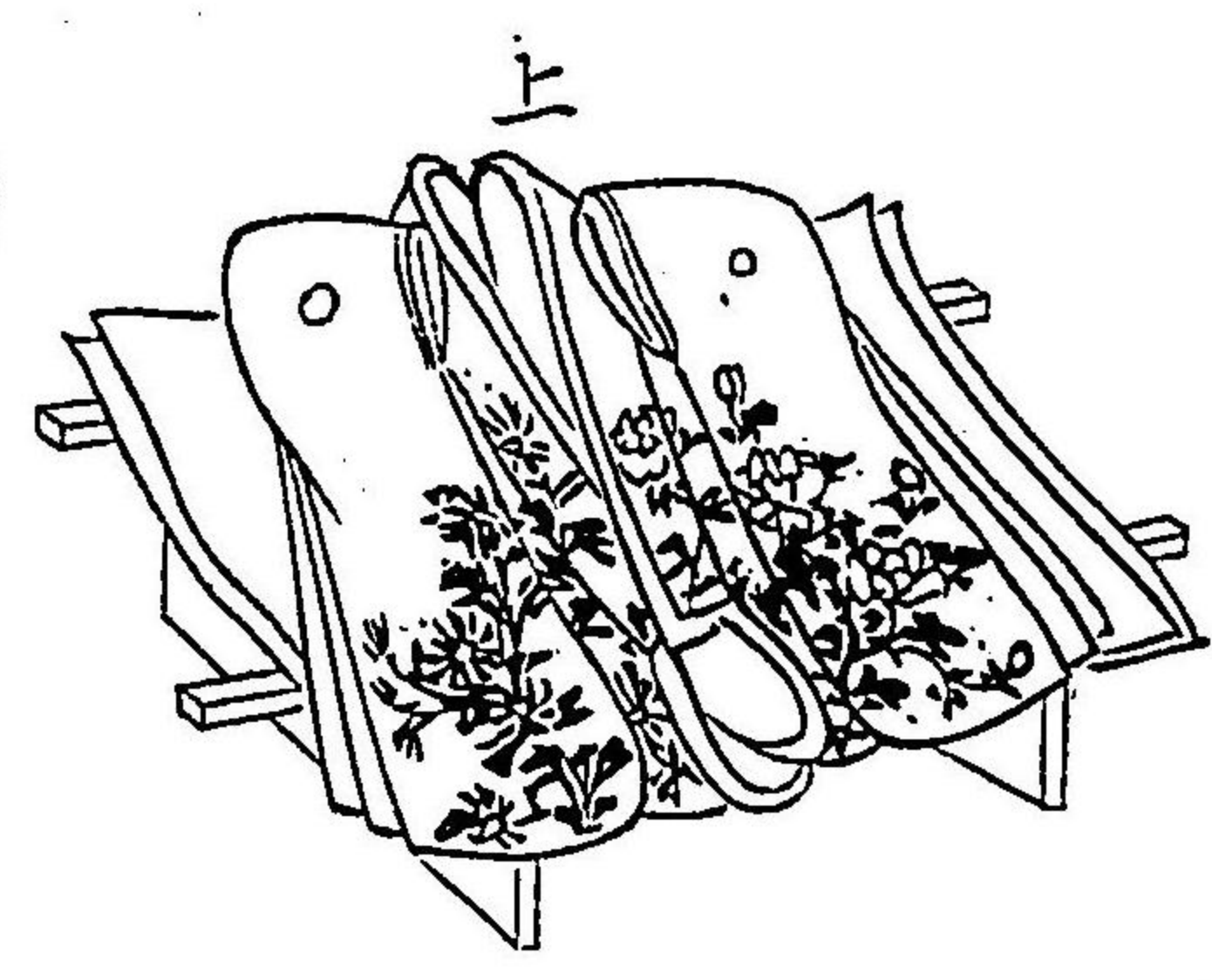
綿の事

よろひ綿袋綿あり、何れも紙に包みて水引をかけてよし。臺に据ゑる方は、其品によりて見計ふべし。結納ならずとも、すべて此心得にて積むべし。樽の手の包み様は、實踐の部、折形の所にかゝげざりしが、こは

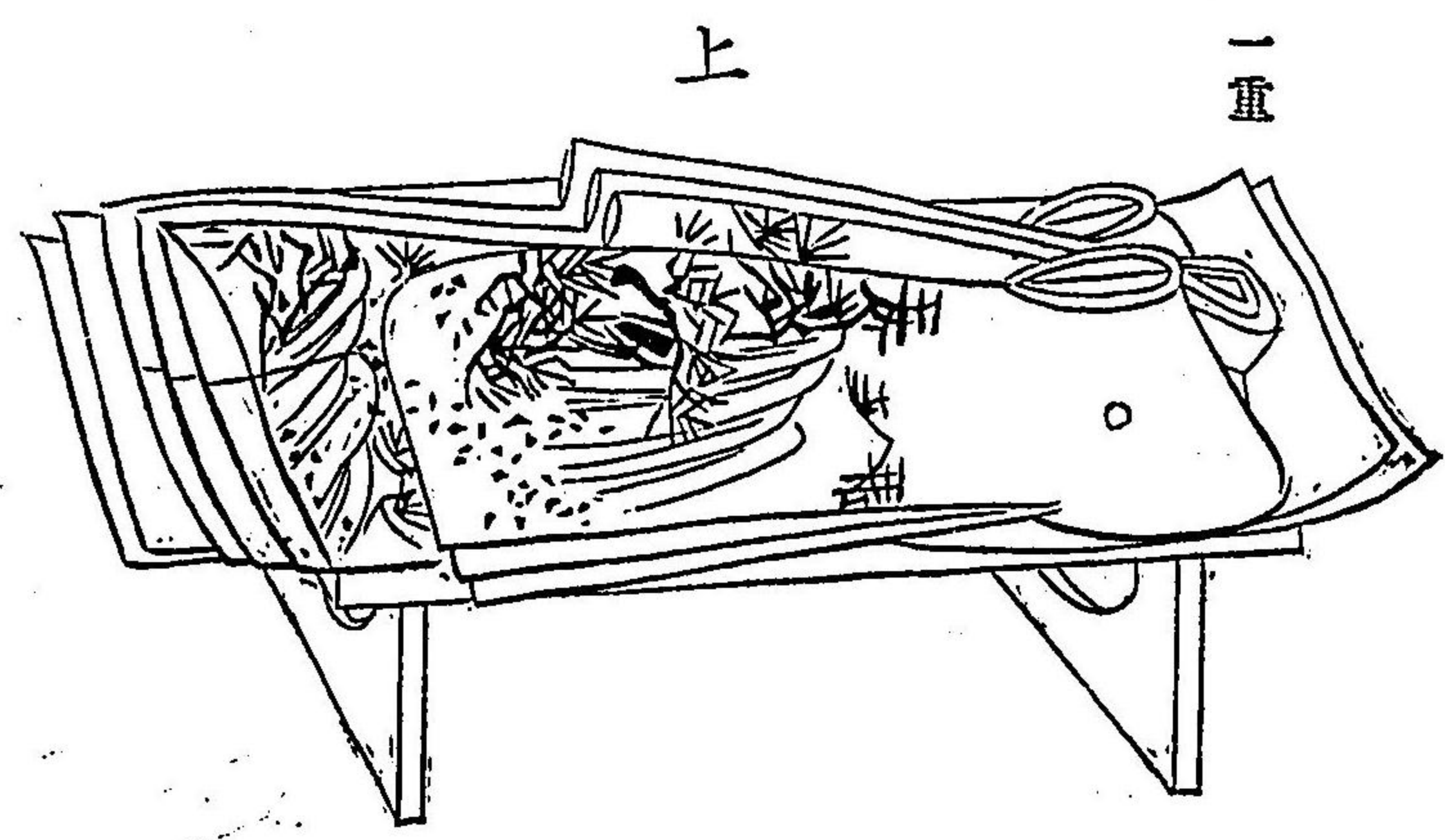
小袖三重



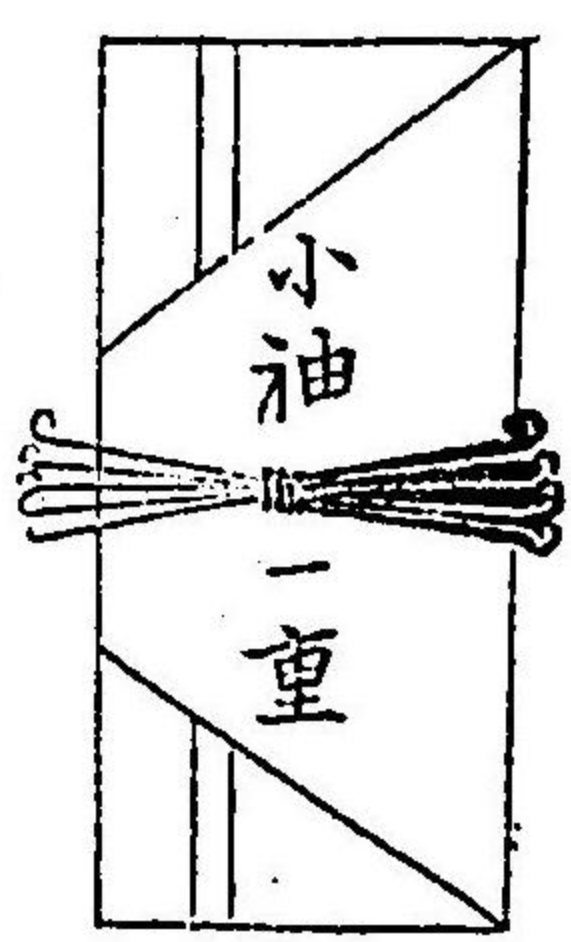
同二重



同一重

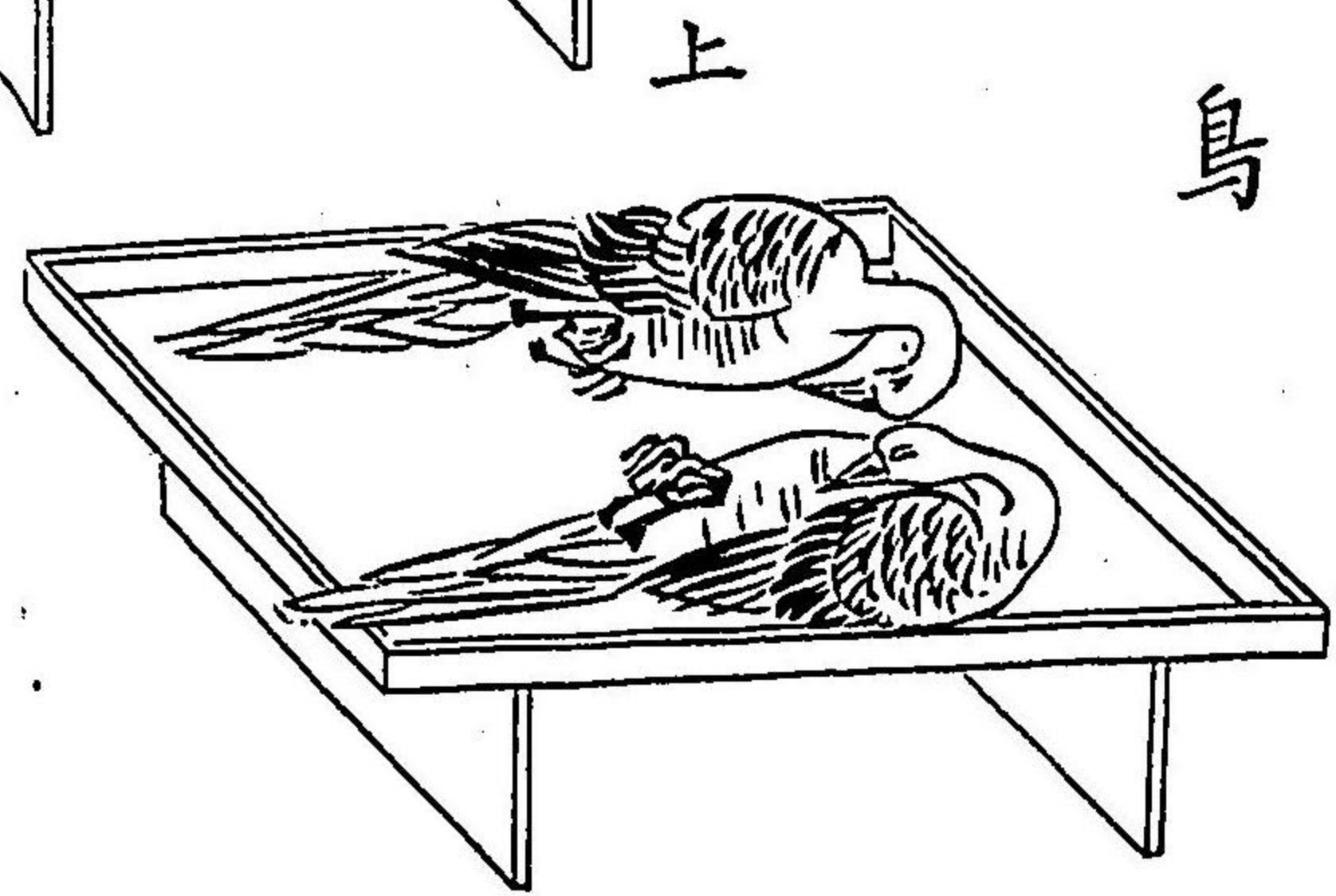
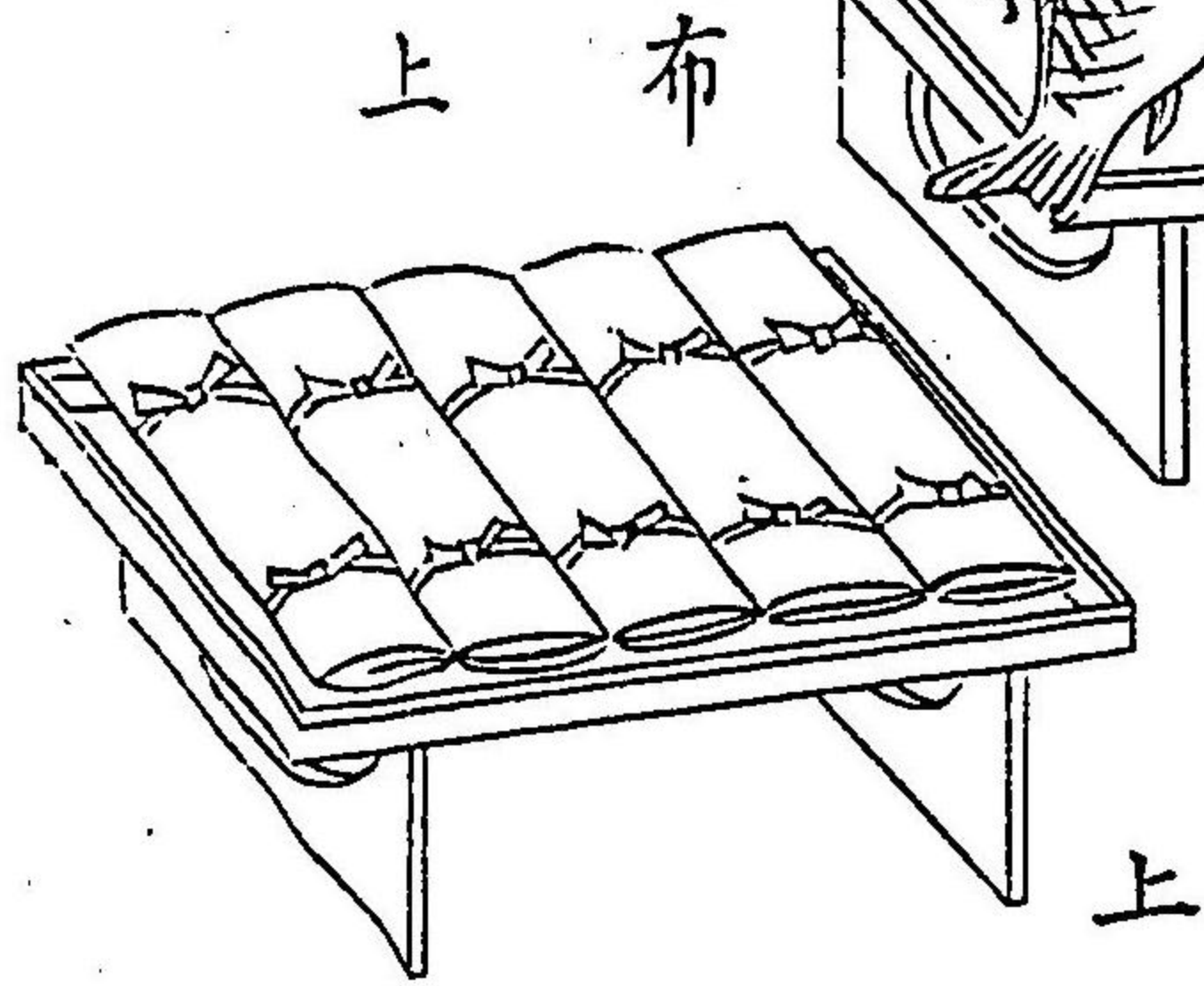
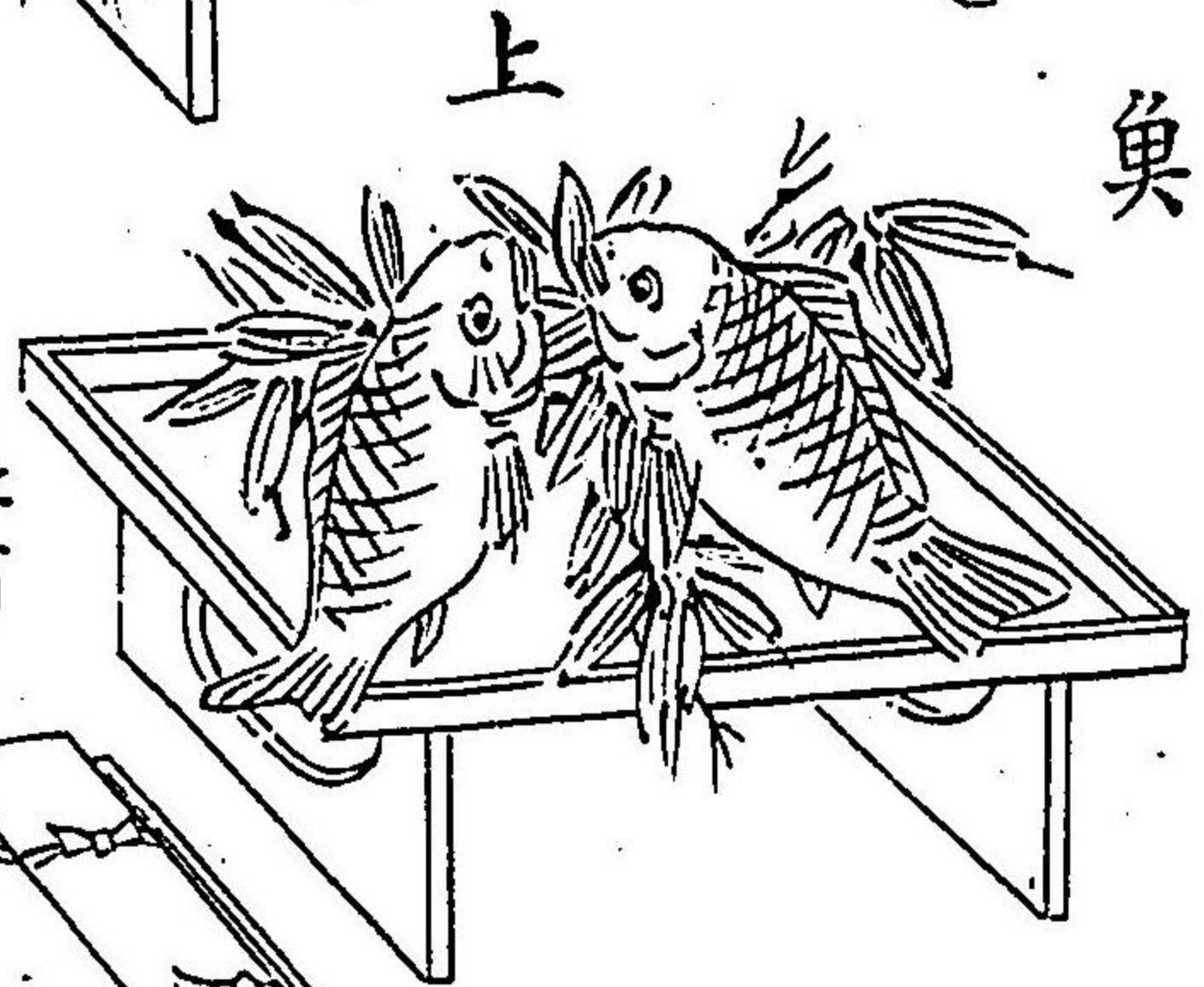
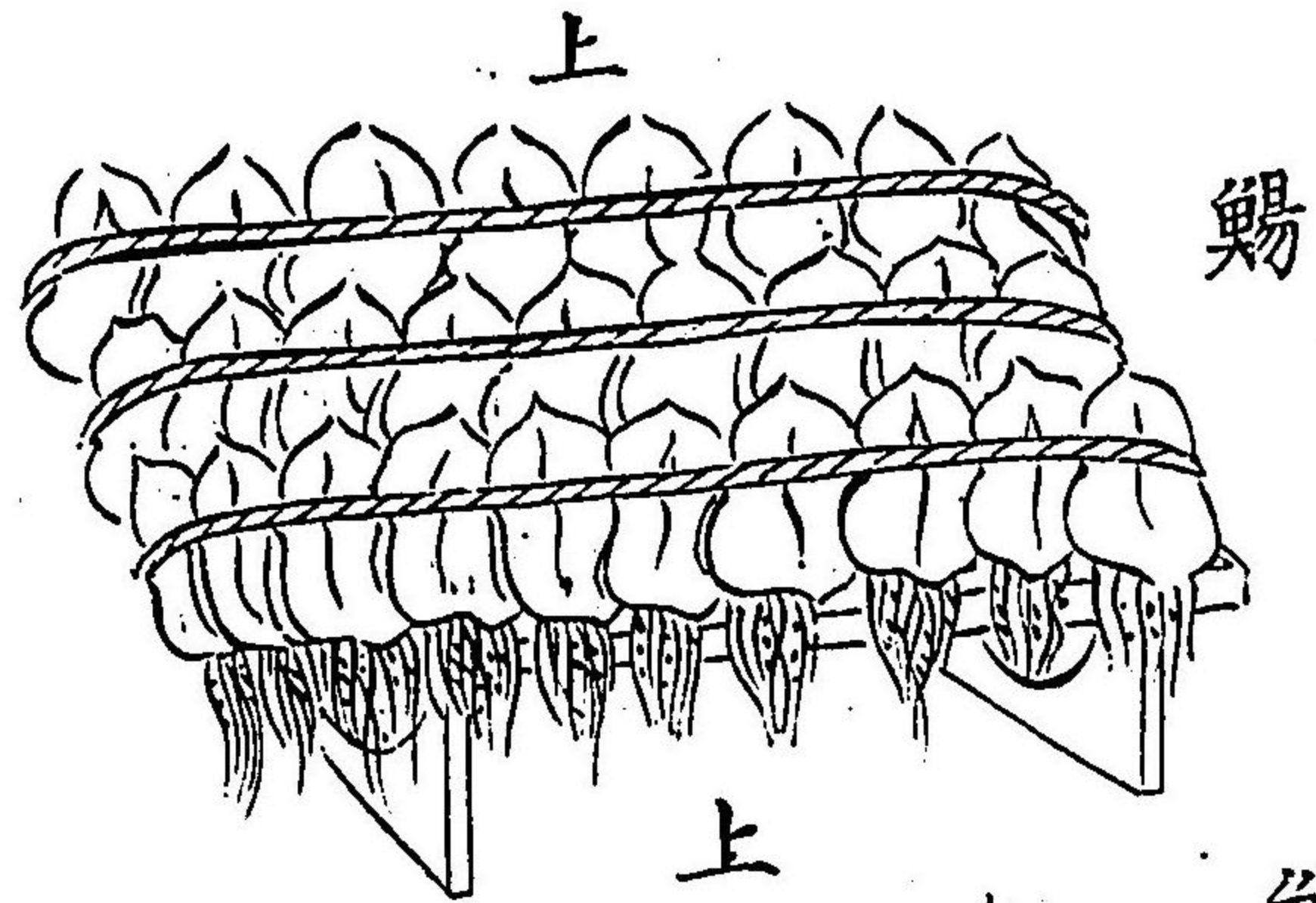


小袖代にて贈る時は下の圖の如くして裏にのせてよし

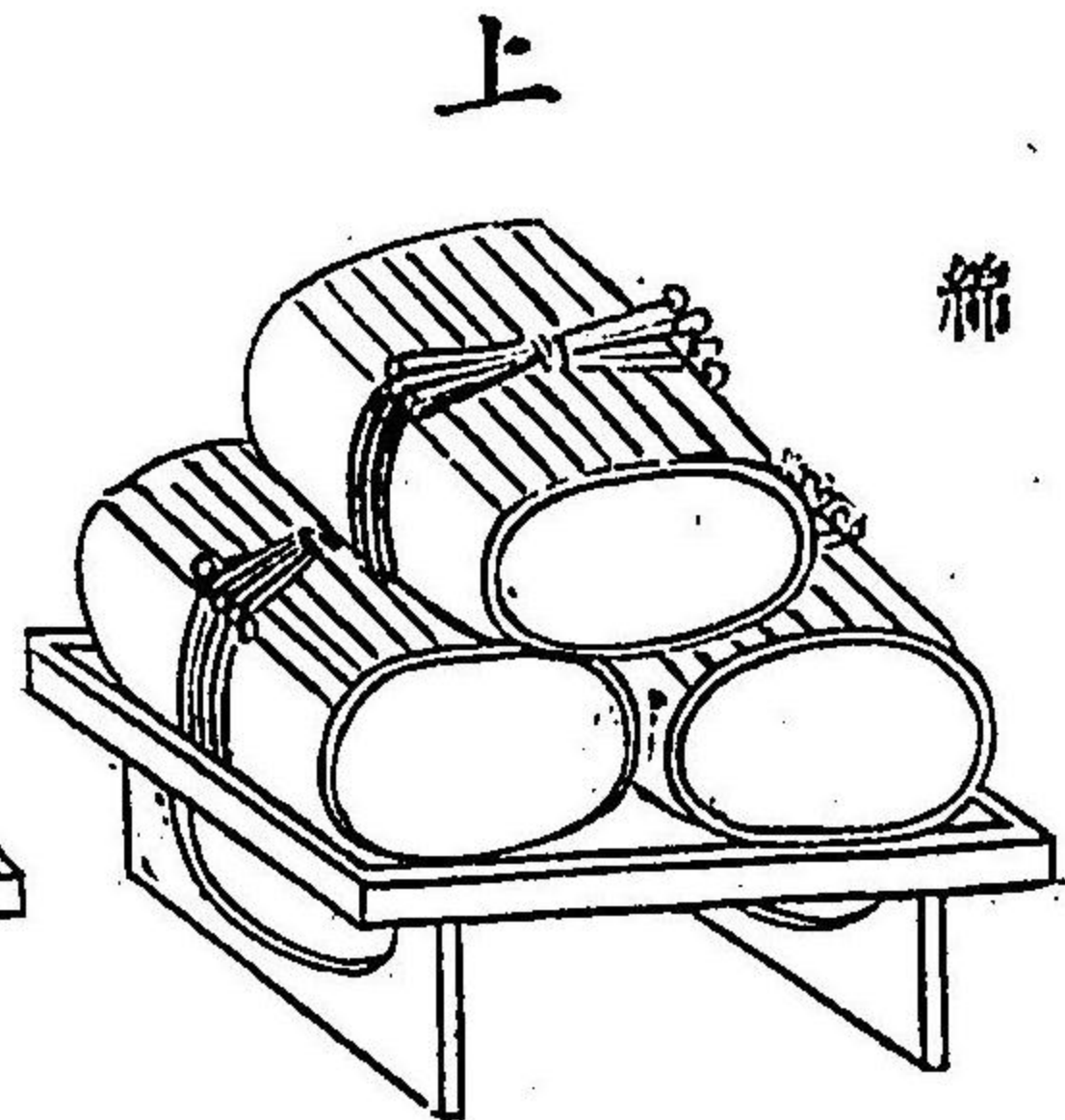
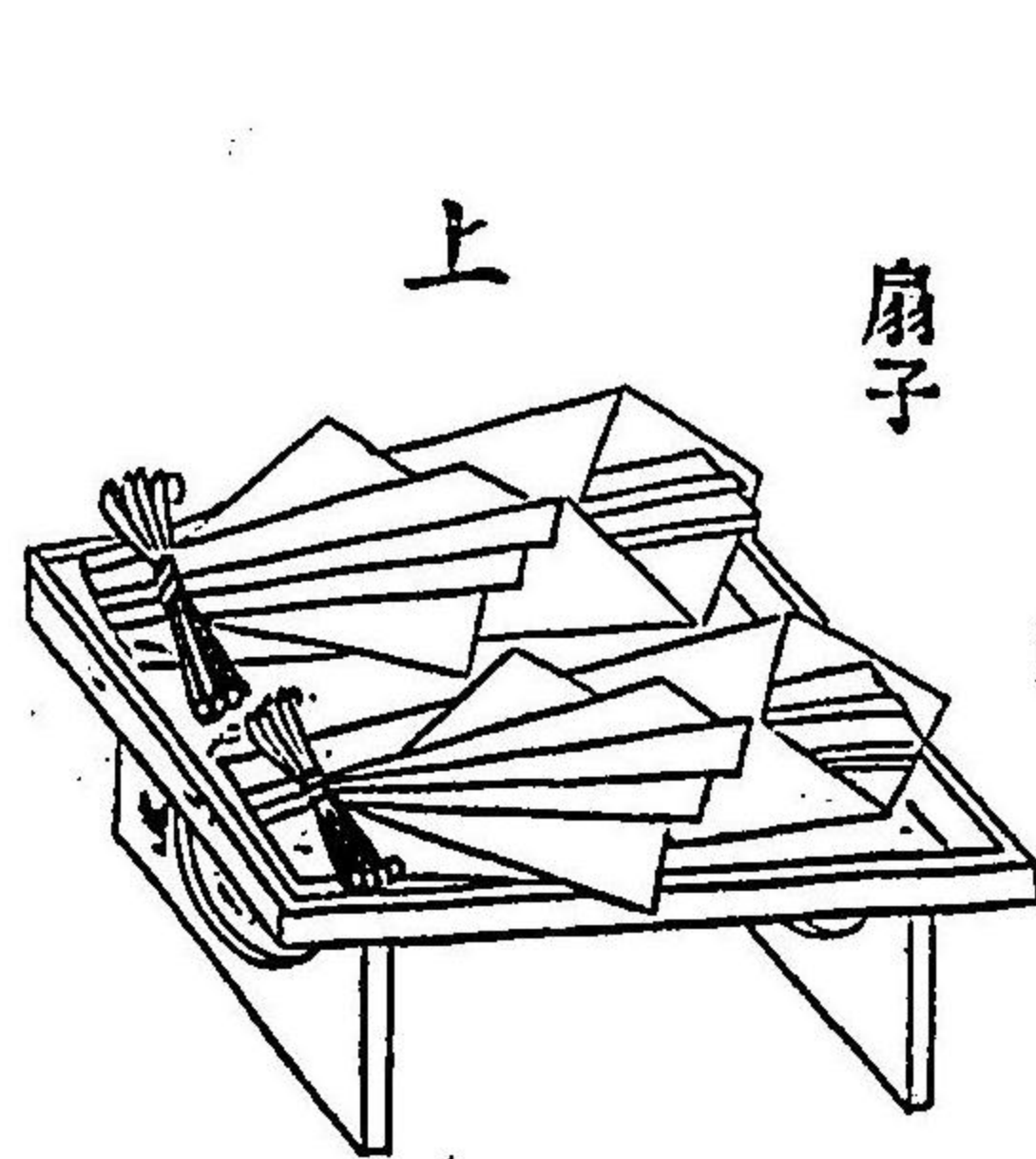
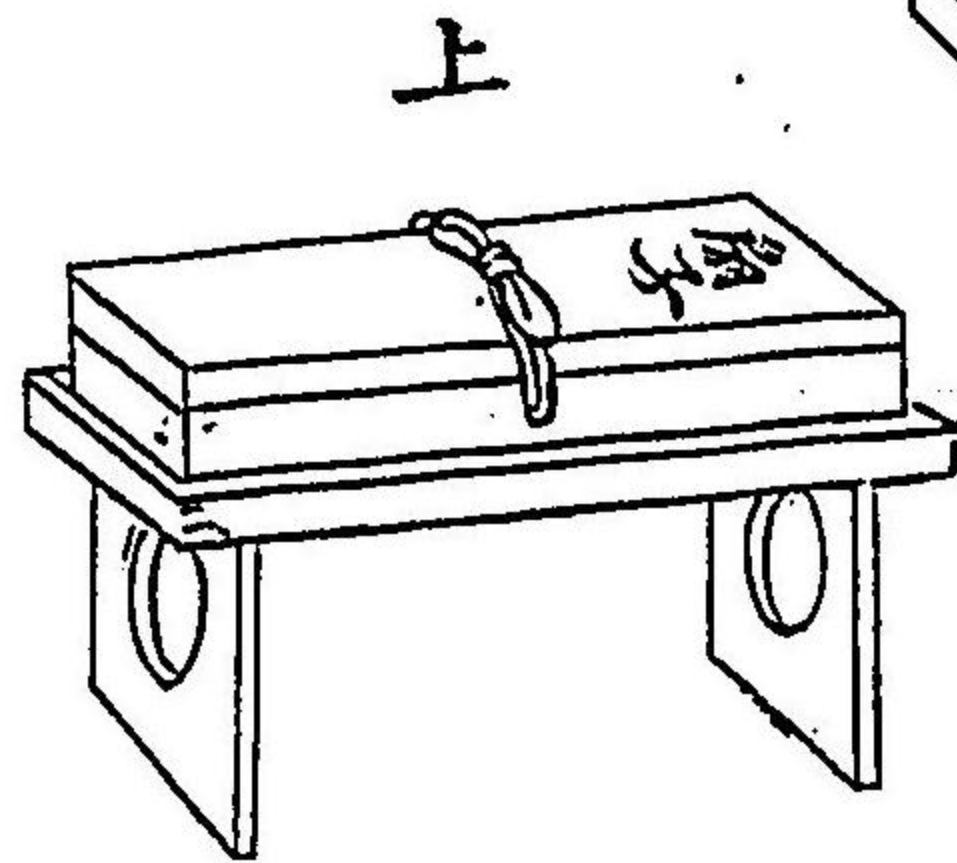
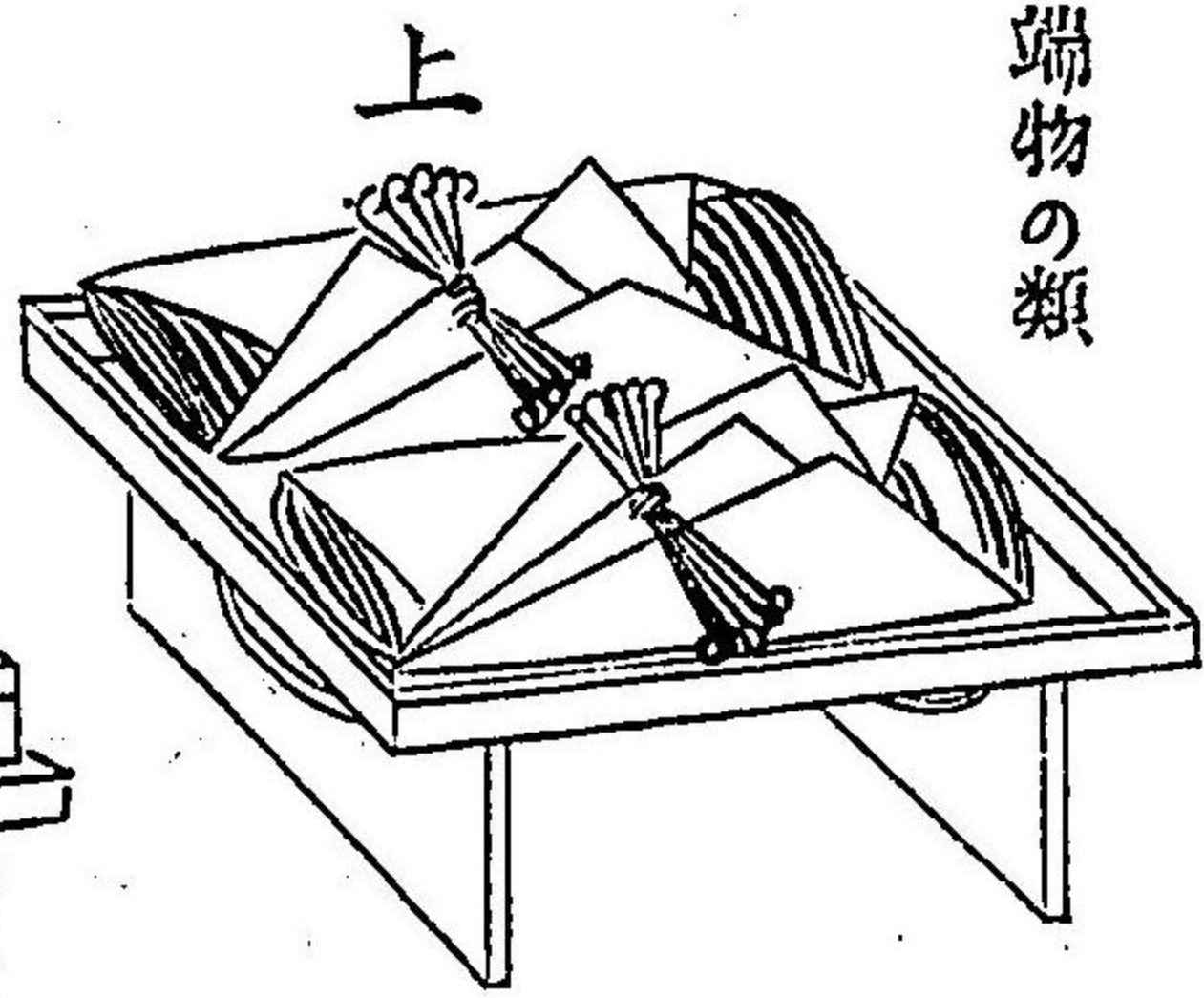
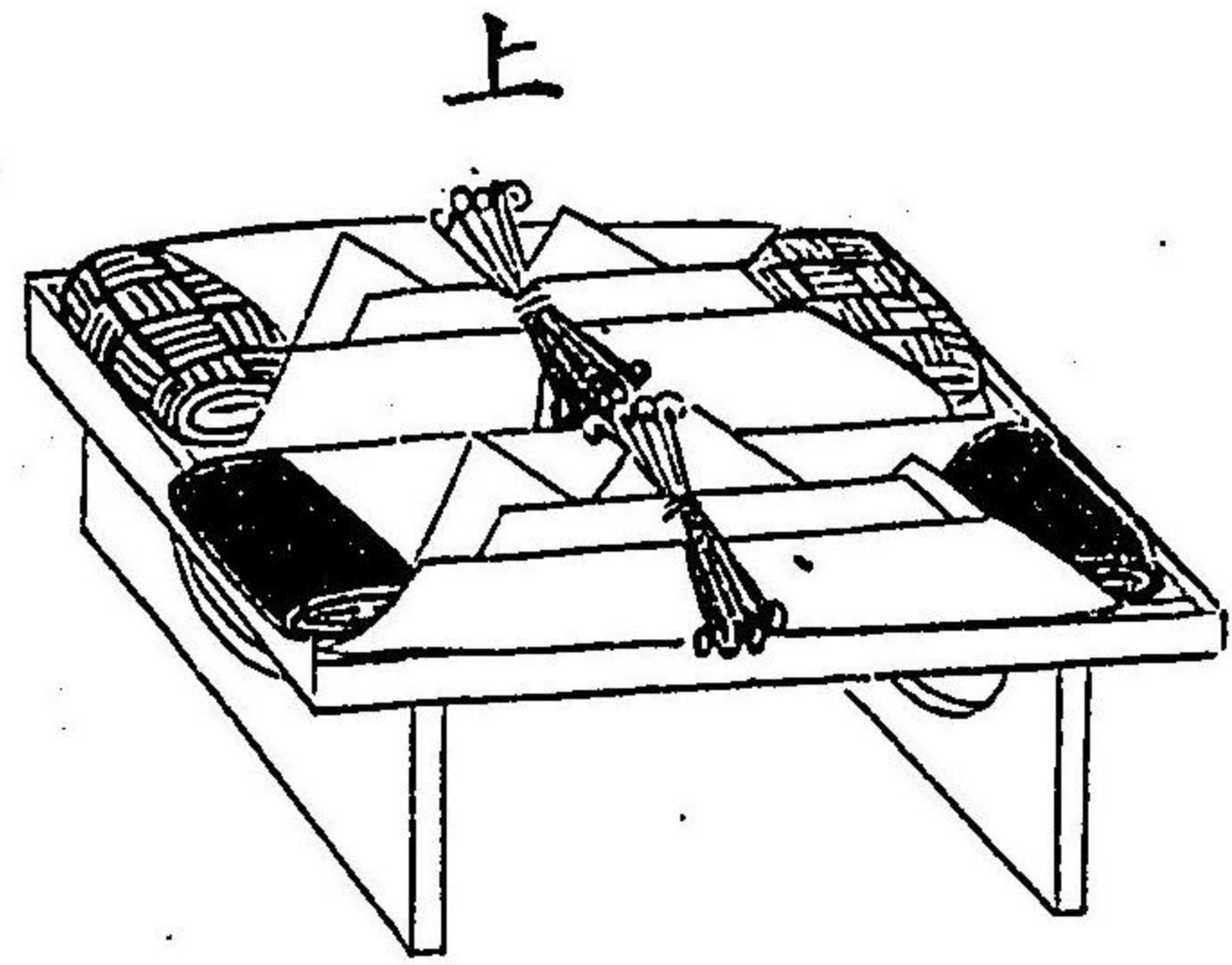


何れも襷を添ふるな

新撰女禮鑑 後編 心得の部



新撰女禮鑑 後編 心得の部



里出の心得

中々むづかしくして、圖にて示すもさとり難かるべく、又水引のかけ様も口傳なればなり。近頃は婚儀の一切を引受くる商家有りて、結納其他の贈り物の包形など其方へ任せて取揃ふる事流行せり。但し商家の事なれば、正しき作法に非ずして、猥りに形容のみ飭り、素人の目を迷はすが如き事あれば、これらもよく心得おくべき事なり。

里出の心得

縁女實家を出づる時、其父母と盃事ありて、二獻目に父より訓戒ありしものなり。本式は三獻の物を出し、酌人二人出で、別れの酌をなし、右終りて縁女は乗物に乗る。此時乗物の人夫は、新しき草鞋をはきて内に入り、縁女の乗物をかつぎ出す時、門内に松明をたき、其上を踏越えて出づ。此時下部は其松明を手

引移り

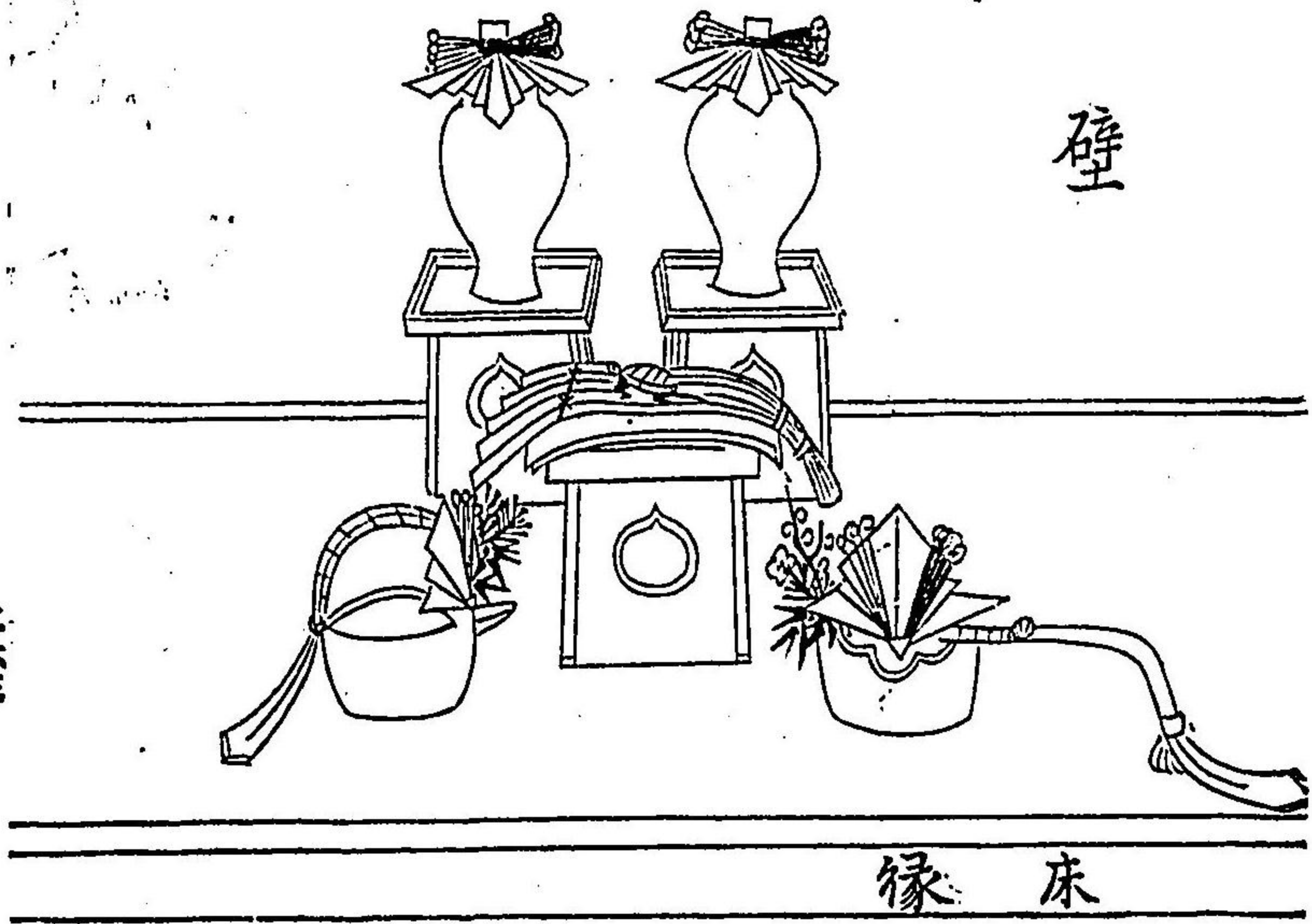
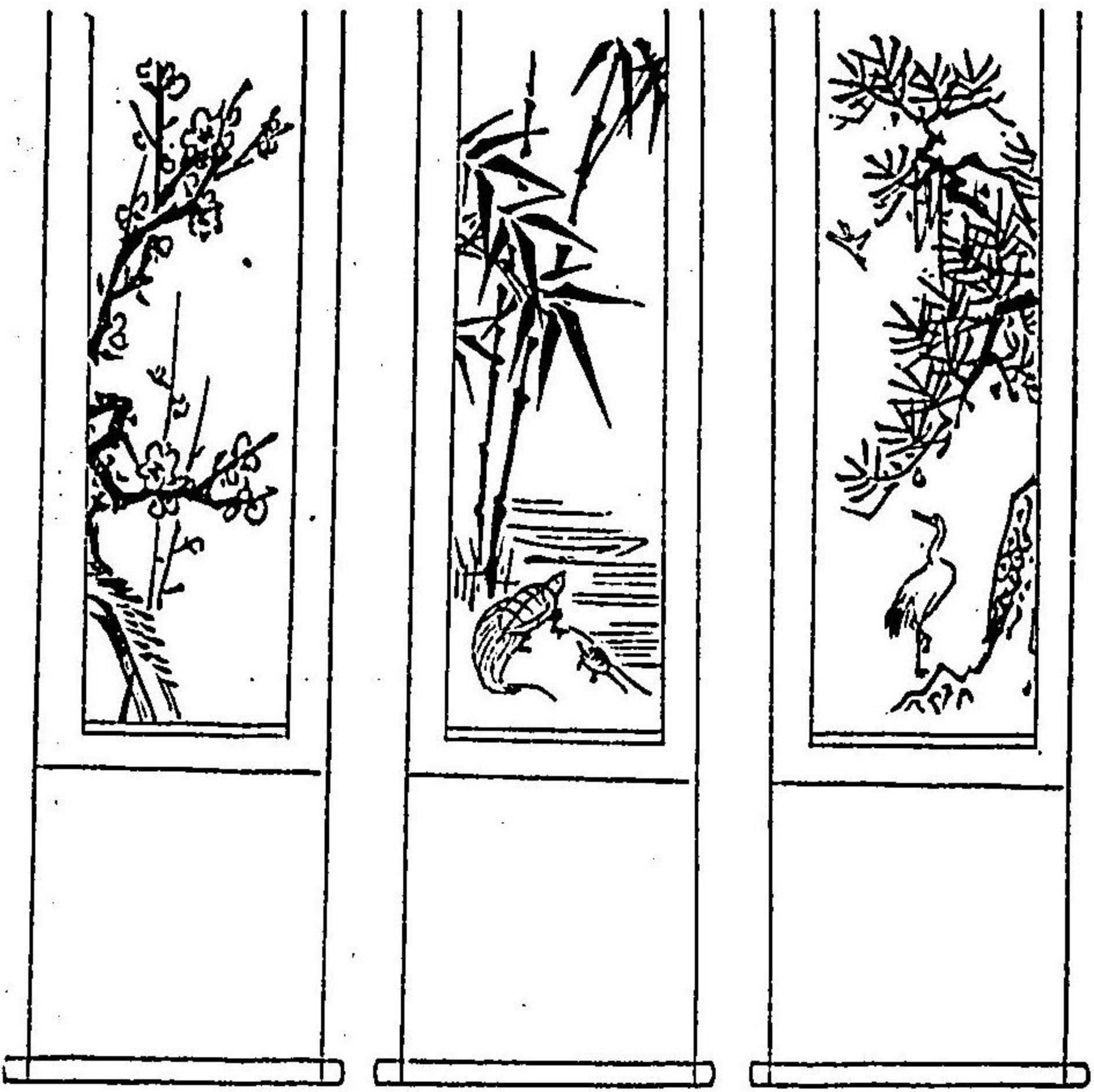
早く持ちて門外に出で、又火をたく。此時縁女の乗物又其火を踏みて出で行くを法とす。

此松明を越えて門を出づるには、種々の説あり。又俗に葬儀に同じきを以て、實家を死して出で、夫の家に行くといふ。これ死したる者、再び其家に歸らざるを以てかくは定めたる作法なりとぞ。近代は乗物も廢れて馬車人力車に乗りて嫁する風俗なれば、松明をたく事も、いつしかすたれたるなり。縁女、馬車人力車などに乗り、實家を出づる時、其門をかへり見る事をいむなり。

引移り

當日婿方にては、相當の裝飾を設け置く事は、すでに前にものべたる如し。又夫婦のかためをなす座敷を祝ひの間、又は壽の

間ともいふなり。本式は床の上に二尊(伊弉册尊)の御影を祭り、水引を張り、八足臺を置きて和稻荒稻二重の餅、瓶子置鳥置鯉、其外種々の飴りをなす。其作法こちたき事あれど、近代はさることごとくしき作法は、廢れたるが如く、やごとなき方々にも、之を行はせ給ふと稀なり。中等社會に於ては、殊に何事も簡便を要する風俗なれば、先づ床にはめでたき畫の三幅對の掛物をかけて、其前に瓶子一對を白木の三方にのせ置き、其前に銚子提子を飴り置きてよし。又瓶子も畧する時は、床前に熨斗、匏三方と盃の三方を置き、銚子提子を飴る事もあるなり。瓶子を飴る時は、夫婦着座せざる前に酌二人出で瓶子の口の雌蝶をぬきとり、三方の上に仰向け置き、又雄蝶の瓶子の口をとりて、雌蝶の上へ伏せておき、瓶子の酒を提子へ移し、瓶子の



縁女より當日土産物に添ふる目錄は左の如くかくべし。何れも上包を用ふるをよしとす。

えん上	
御ふく地	一まき
御下着	二枚
御あふき	一はこ
御さかな	一折
御たる	一荷
以上	

えん上	
御袴地	一端
鹽たひ	一折
御酒	二たる
以上	

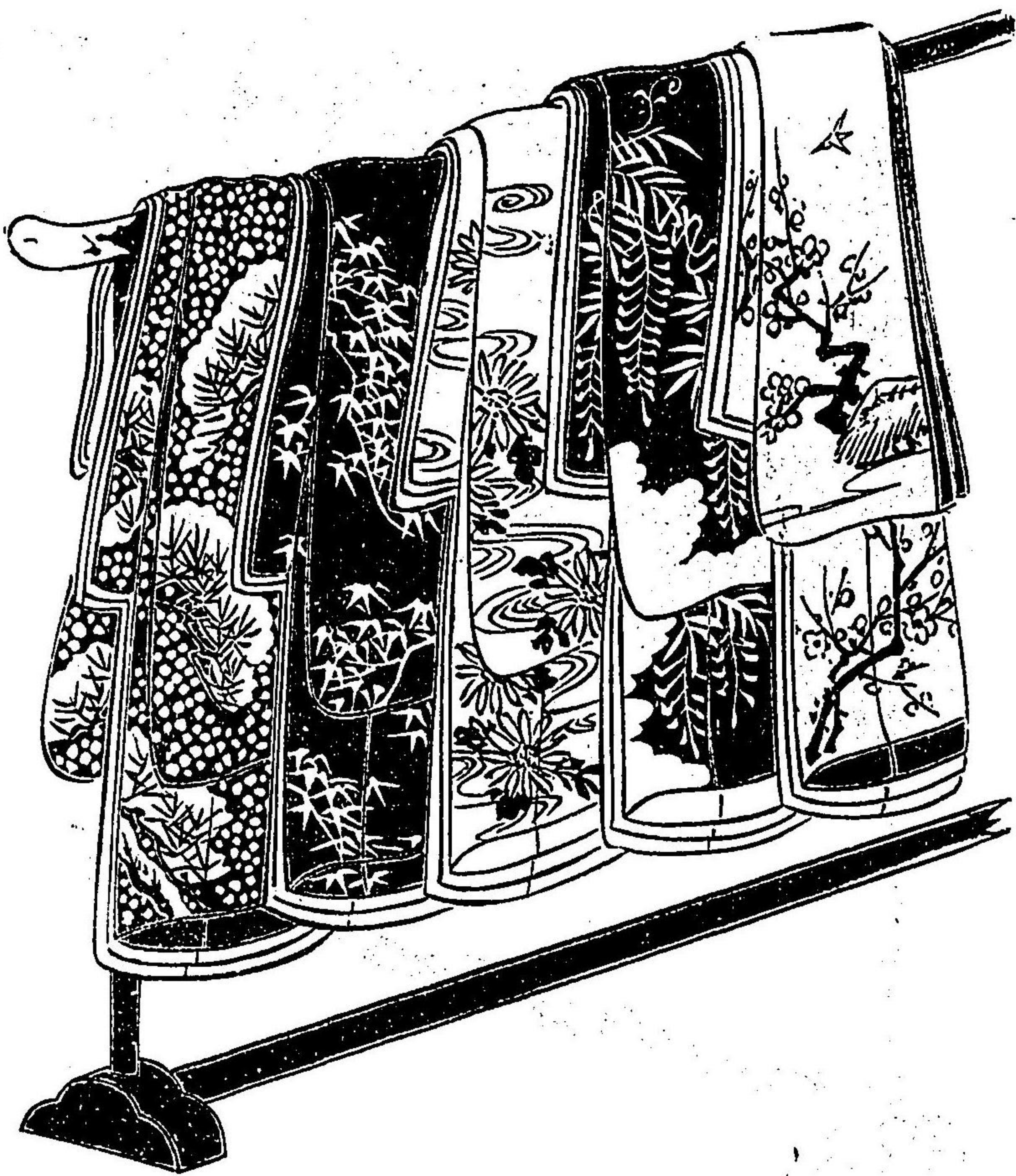
えん上	
御わた	十把
するめ	一をり
御さけ	二たる
以上	

口は元の如くにして銚子提子を持ちて退き酒を銚子の中へ加へおくものなり。又瓶子の酒を夫婦着座の上にて酌二人進出で末座にて一禮し、二人双び進みて前の如くすることもあり。

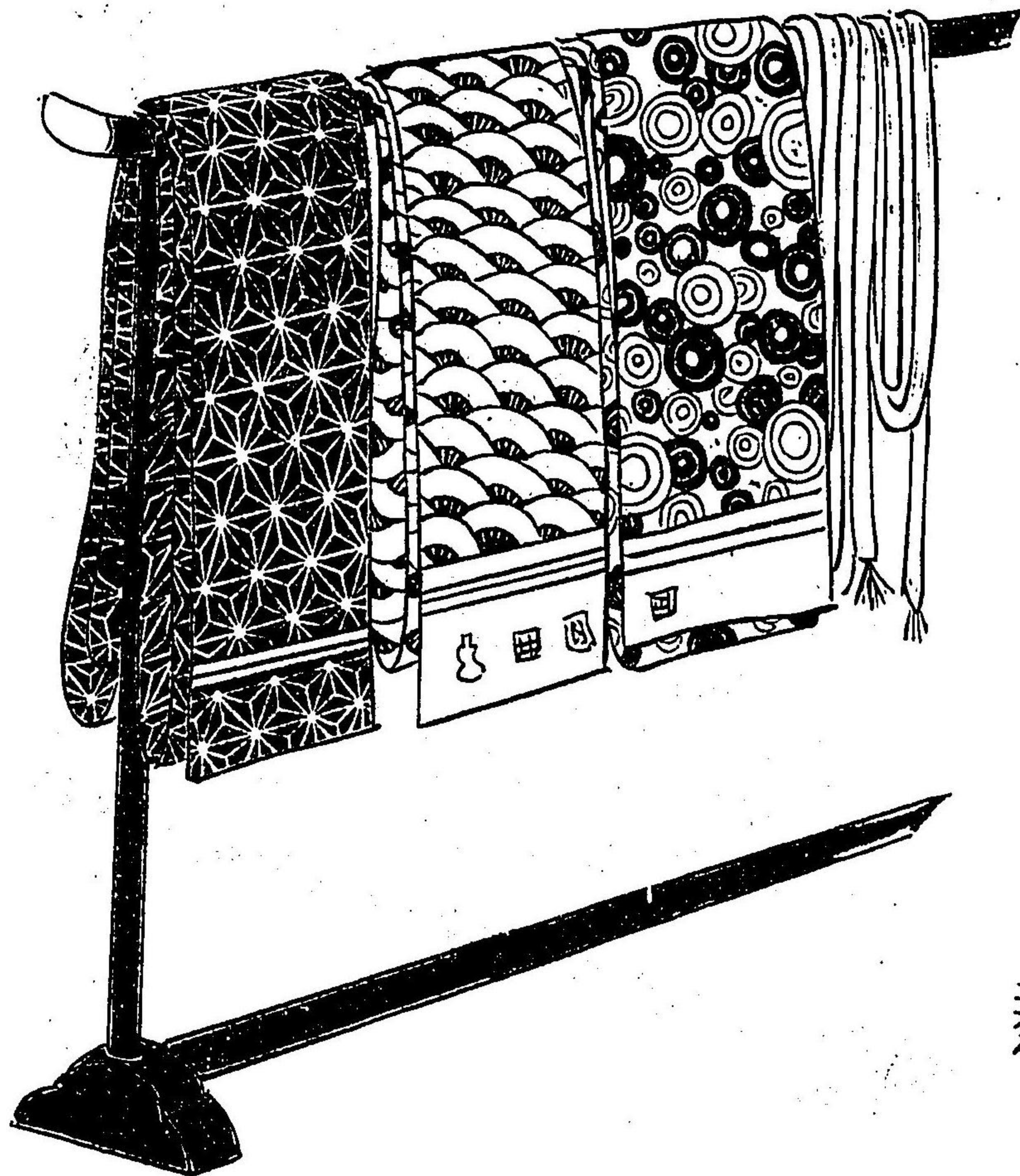
縁女着座すべき方へは、屏風をたて(夏は随意、次の間其他廊下などには、二枚折の屏風又は衝立など、用ひおくをよしとす。)化粧室には縁女の鏡臺櫛臺其外化粧に關する道具を位置を整しく飭り手あぶり火鉢其外の用意は勿論衣桁の飭りあるべし。納戸は押入の戸を外し、新薦を敷き其上へ縁女の持参したる箆筒長持其外夫婦の道具を双べ置くべし。右にのべたる化粧室納戸の飭りなどは縁女方の物なれた

る女中これをつとむべし。  
 又衣桁飭りに心得べきことは、衣服の色の取合せなり。昔は四季により、其色の組合せにも差ありて、春は青色を第一とし、夏の初めよりは紅を先とし、秋は黄又は白を第一とし、冬は黒なり。當時は右の如き色を用ひざる事なれば、只其心持にて飭るべし。例へば近頃流行する鼠色にも紅にかよひて櫻鼠といふあり、紫に似て藤鼠などいふもあり、又黒みたるもあるなれば、これらを程よく取合せて飭りてよし。  
 衣桁に衣服帯をあはせて飭る事もあり、又衣服ばかりにするも随意たるべし。左に圖をかゝぐ。

しべるた意隨枚三枚五は服衣



しべる筋りよに合都筋三筋五も帯



右の圖は、當時の風俗に合せてものしたるなり。猶其時と場合によりて、取計らふべき事なり。

獻立の事

獻立の事

當日饗膳獻立は、其式の重きと事そぎたるとにより、一汁五菜以上二汁五菜七菜など用ふべし。魚菜の取合せ方は、例に變ることなしといへども、なるべく縁起をとりて組合すべし。又盃事の時、用ふる三獻の物は、これも其式の重輕による事なれども、普通の家にては、削熨斗腸いり内躬などの眞の式に用ふる物も、ふさはしからねば、左に行の式の畧したるをあぐ。

初獻 二獻 三獻

熨斗 雑煮餅 鱈吸物

勝栗 湯 數の子

昆布 黒大豆 梅干

右何れも白木三方に土器盛にし、食足を用ひ、耳土器に箸を置く法なれども、畧する時は、耳土器をはぶくも差支なし。又今一層畧式を要する場合には、三方を用ひず、帛紗料理にして、普通の膳碗を用ふる事もあるなり。又一等畧せば、初獻を出さず、熨斗、匏、三方を引渡して、雑煮、吸物を出し、盃事を行ひてよし。鱧の吸物は、女には右鱧、男には左鱧を薦むるなり。何れも替りは用ひざるものとす。

置鳥置魚の事

置鳥には雉子を用ひ、置魚には鯉を用ふる習はしなり。これ二尊へ牲を備へたるより、はじめりしものなり。故に尤生物を以てするを本儀とすれども、近頃はこれを造り物にして、糸花などの麗しき飴りをなして、用ふる事となりぬ。これ其始め暑氣

置鳥置魚の事

島臺

島臺

つよき時など、其鳥魚の腐敗をいとひてより、風俗の如くなりたるものなり。中等の家にては、これを用ふるに及ばざるべし。昔はこれも生物を以て造りて用ひたるものなれど、今は置鳥置魚に同じく、糸花にて造り、高砂の人形、其外麗しく飾りて、須濱形の白木臺に、据ゑたるものなり。これ亦中等の家にては用ふるに及ばず。猶此外土器の物、五種の盛物など、昔は用ひたるも、當時は中等以上にて、もさることごとくしき式を行ふことなくなりぬ。式日、其席へ出づべき給仕の女中、酌人などは、兼て其手續きを習練し、物品薦撤の周旋に、不都合なき様、心がけおくべし。

寢室の事

寢室のこと



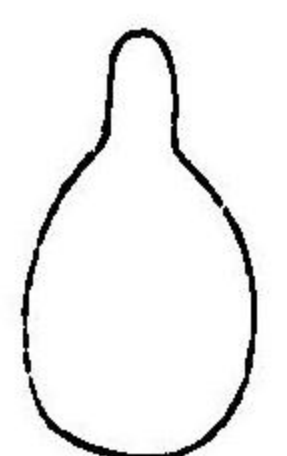
寢室の事は口傳なりとす。但し其大畧をいへば、床の上には鶴鶴の臺を置き、其前に土器盃を据ゑたる三方銚子を飭り置くを常とす。其他の事は口傳なり。

三日の祝

三日の祝

三日の祝をある地方にては、打合せの祝ともいふことあり。そは婿より舅姑の方へ、嫁の實家よりは婿の方へ、双方時間を打合せ、途中にて行逢ふ様にして、餅に樽肴を添へておくるを作法とする故なり。此餅を鳥の子餅といふ。其數は五百八十、又は三百六十か百八十、あるひは百二十の定めなり。是を兩家とも其親族朋友へ贈りて祝ふ事なれば、其數は身分により定めてよし。餅は紅白にして鶏卵の形に造るなり。雞は諸鳥の中に、最も子を多く生むものなれば、其縁起をとれるなり。昔は之

を筵にて造りたる大なる吠に入れて贈る作法なりしも、當時は相當の大重箱、又は行器など用ふる事となりたり。又これを畧して、赤飯を贈るも、差支なしといへども、餅の方最本儀なり。源氏物語あふひの巻に、光源氏の君維光に仰せて、餅を造らせ給ひしとあるを見ても、古き習はしなること知らるべし。



今、東京にて嫁取の後、親族知己の人々へ、鶴の子餅とて此如き形の餅を造りて、紅白一重宛贈るも、三日の祝ひと、其時の答禮とを兼ねたるものなり。

又京都地方にては、結婚終りて、其嫁たる人、禮服を着し、親類知己へ、答禮に行く時、紅白の饅頭を紙に包みて、手土産とするなり。これ又前の鶏の子餅をかたどりてなり。すべてこれらは土地の風俗習慣に従ひて、身分相當に行ふべき事なり。

注意

注意

引移り後七日のうちは、双方の親族知己より、新夫婦へ部屋見舞といひて、各身分相當に餅菓子酒肴など贈ることあり。其使ひの者へは嫁より多少の引手物あるべし。又其家の出入町人其他の者すべて引移りてより始めて來るには、又相當の土産物を遣すべし。

里ひろり

里披露

引移り後、日をへて嫁の實家へ、新夫婦の行くをいふ。其日は、又夫婦禮服を着て、嫁の両親及び兄弟姉妹其他へ、相當の土産物を持參すべし。又家僕家婢其外へも、身分相應に、金子を包みて與ふるものなり。

其日里方にては、室内裝飾は勿論、門の内外其他を清潔にし、家

内の人々禮服を用ひて、饗應の手續きに注意し、身分に應じ何汁何菜の獻立をなし、調理に心を用ふべし。

新夫婦入來らば、これを客室へ導き、休息の上、舅姑出で、對面あり、時宜を計りて、箸初の臺を薦め、三獻の物を出し、盃事あり。此時新夫婦よりの土産物の披露あり。盃事終りて、休息の間へ退き、再び出で、饗膳を出だす順なり。

又略する時は、三獻の物をはぶき、吸物を出し、普通の銚子にて、盃事ありてよし。

新夫婦歸る時、里方より又相當の土産物を遣はすべし。こも亦身分相當にすべき事なり。

當時は、里披露にむこの父母をも招く事となりたり。さる時は、双方人の數多ければ、兩側に別ちて着座し、酌は千鳥にすべし。

酌の取様は婿の父より始め、千鳥にとりて、又婿の父にて終むる順なり。

舅入

舅入

嫁の父母を始めて、婿の家へ招くをいふ。其用意、手續など、すべて里披露に同じければ畧す。

待女郎の  
こと

待女郎のこと

引移りの當日、婿方にて、第一心得べきは、待女郎の撰定なり。こは婿の親族中の夫人にして、物なれたるを最よしとす。然らざれば、婿の親友の夫人、あるひは家來中の主たる者の妻にして、心得あるを以て、定むべし。

待女郎は、縁女の來たる時、玄關へ出迎ひ、休息所へ導き、茶菓など薦め、介添の者へ婿方の都合、其他の打合せなどして、時刻來

介添の事

介添の事

らば、縁女を祝ひの間へ導くものとす。又待女郎の身分も、し尊き時は、玄關へ出迎ふる事を、婿方の主なる女中に任せ、縁女休息の間へ着座したる後、出で、對面し、前の如く取持つものとす。

介添は縁女の實家にて、撰定するものなり。故に縁女の心おきなき人にして、萬事にあたり、心きゝたるを要す。縁女引移りの時、祝の間に出で、縁女の末座に双び居て、盃を取扱ふ役なり。其他すべて縁女に代り、婿方へ打合せべき用向など、引請けて、取計らひ、縁女其家に馴染む迄は逗留し、時宜を見計らひて、退くものなり。但し身分により、介添の人を以て、付添の女中として、其家にとゞまる事もあるなり。

出産の事

出産の事

新撰女禮經 後編 心得の部

婦人妊娠して五ヶ月経なば、帯の祝ひをすべし。其日里方の父母は勿論、近き親類を招き、身分相當に饗をまうけてよし。里方の父母よりは、紅白の絹八尺宛を、相當の折形したる紙に包み、水引をかけ、樽肴を添へて贈るものとす。又其日は、産婆をまねき、婦人の腹に、前の紅白の絹を巻きて、帯とするを作法とす。また此紅白の絹は、男の左の袂より、女の右の袂へいれて渡すを作法とすることもあり。何れもこれを其日の祝ひとして、其帯は腹に結ぶ容をなしてよし。さて此絹は、小兒生るゝ前に、小紋に染め、祇園守りの紋をつけて、紅絹を裏とし、衣服を造る習はしなり。又此日産婆へは祝儀として、金子を與ふべし。

分娩の事

分娩の事

婦人分娩の催しあらば、白き縁取りの上敷を其室内へ敷き、白き寢具、白き三つ枕(身分により寢具は白)屏風の用意あるべし。小兒の初着、其外の品々は、白木臺に積み、産室の片隅に置き、又薫を程よくくゆらせおくものなり。其他の事は、産婆醫者の指圖によるべし。

出産ありて後、すべて産室に用ひある、火鉢其外の調度は、他室に用ひざるものとす。これ産の穢れあれば、憚りてなり。

七日のうちには、小兒も他室へ出づる事を禁ず。これも同じく、其穢れあるが故なり。

三日目

三日目

三日目は、産婆來たりて、小兒の湯あみをなす。産婦の床の穢れたる物など、改め、産婦の身の巡りを清潔にする迄なれど、此日

膳部を調へ、醫師産婆其他に薦めて祝ふものなり。

七日目

七日目

七日目を七夜といふ。此日は小児の名披露の祝ひなり。小児の名は、祖父、叔父のうち、年長にして、幸ひある人より贈るべし。其認め方は、奉書、杉原何れにても、二枚重ねて折紙とし、其中央に名をかき、三つに折りて上包みをなし、白木の臺に据ゑ、樽肴を添へて送るべし。又産婦へは夫より時服一重ねを遣すことなり。里方の父母よりは、小児の初着を贈るを法とす。さて其日は里方の父母を始め、近き親族を招き、相當の饗をなし、又産婆へ祝儀として、金子を包みて、與ふるものなり。昔は初着に、男なれば短刀、女なれば守り刀を添へたるものなれど、當時は隨意に計らふべし。但し初着は紋の染模様、白小

袖を重ねることなり。

右の外二十一日目、三十五日目などあれど、作法とすべき程の事もなければ畧す。

百二十日

百二十日

此日小児の膳椀を新たに造り、始めて食事を薦む。これを食ひ初といふ。これも身分により、相當の饗を設けて、里方の兩親を始め、近き親族集りて祝ふべし。但し小児の膳は、其母箸をとり、小児へ薦め、盃をとりて、これを祝ふ容をする迄なり。百廿日經て、吉日をえらみ、小児氏神へ始めて參詣す。これを宮まゐりといふ。土地によりては、宮まゐりをこちたく行ふ風俗もあれど、こは只始めて神へ參詣して、守りを受くる迄の事なれば、正しき禮儀もあらざるなり。

髮置

新撰女禮鑑 後編 心得の部

髮置袴着裳着

近き頃は、小兒の髮を剃ることなき風俗となりしより、髮置の作法も必用ならねど、一例をかゝげおくなり。小兒三歳の十一月の頃、始めて頭に毛を剃り残して祝ひたるものなり。其日小兒の頭へ麻糸もて造りたる鬘といふ物をかうぶらせ、氏神へ參詣し、其かつらを神殿へ幣物を添へて納むるを作法としたりき。此鬘の上へは扇子三本を合せ、松竹梅の造花を形容して、下へ麻の長くふさやかなるを付けたるものなり。其心は麻糸の如く髮の白くなる迄成長して、末長く幸ひあらむことを祈りしものなり。

袴着

男兒には五歳の十一月始めて袴を着す、これを袴着の祝ひといふなり。昔は上下といふを造りて、碁盤の上に小兒をのせて、

裳着

祝ひしものなり。當時は袴を造りてこれを着せ、その近き親族を招きて祝ひて可なり。女の兒には七歳の十一月搔取初といふ事あり。こは上つ方にて、裳着といひて始めて裳を着ることなり。中等の家にては、裳を用ひざるより、搔取を着せ始めて祝ひしなり。當時は搔取も用ふる人まれなれば、當時の染模様、の紋附など新たにしつらひて、これを着せて祝ひてよからむ。

吊喪の事

吊喪の事  
死人ある時  
の心得

死人ある時の心得

死亡者ある時は、先づ心得置くべき事あり。死人もし子にして親に先ち、妻の夫の先ちたる如き場合には、死亡者の上へ着せ置く。白服は反様にし、枕屏風も上を下にしてたて置くものな

新撰女禮鑑 後編 心得の部

り。但し順序なる死人は此の如くせざるなり。  
 又死亡者の枕のあたりへ、短刀守り刀のたぐひを置くべし。こ  
 れ死人へ魔のいらざる爲なり。  
 枕元へ白木の机檜紫又は榊香など、神佛其宗派に應じ、そなふ  
 べし。  
 死人湯灌せぬらちは、存命の如くなし、病氣中に同じく、枕を離  
 れずして、之を守り、湯灌後は死人へつとむる作法に従ひ、手厚  
 く取扱ふべし。  
 死亡者ある時は、客室其他すべて床の掛物を外して、裝飾せざ  
 るものなり。  
 吊間の人、其他香奠などある人の姓名を記し、又買入物金銭の  
 出入など、すべて凶事に關する事の帳簿は、別にこれをつくり、

葬儀の事

紙の折目を上にし、細き紙よりにて綴ぢ、上に引結びおくを法  
 とす。  
 死人ある時は、家内の者は、悲哀の情又は病中看護のつかれに  
 て、事務をどるに狼狽すること往々あり。故に親族のうち、物な  
 れたる人々に、すべての事を依頼し、吊問者の接待、葬儀の事務  
 買上物、金銭出入のことなど分擔せしむべし。

葬儀の事

葬儀は人間生涯を終へたる大禮なり。故になるべく身分相當  
 に手厚く行ふべき事なり。葬具其外の事は、神佛其派によりて  
 差あることなれば、掌祠又は僧侶の指示に従ひ、手落なき様取  
 計らふべし。  
 出棺は定め得る時間よりおくれざる様にし、喪主及び近き血縁

の者は喪服を着し、其外會葬の人々は、血縁なくとも華麗なる服は用ふべからず。

出棺の前、掌祠又は僧侶其前に進み、祭文又は經をよみて、拜禮し、次に喪主始め、死人に近き血縁の人々、順次に焼香、拜禮し、終りて後棺を出すべし。

棺をかつぐ人夫は、新しきわらぢをはき、其儘内に入り、棺を出す。此時門内に松明をたき、其上を越えて門を出づ。又其火を門外に移してたき、又其上を棺は越えて行く法なり。

出棺の後、死人の枕となりし所へ、白木の机を置き、位牌、神又は柶、紫、其外を据ゑ、屏風をたて、香花など備へて、七日々々のつとめは勿論、其忌中は通夜すべきものなり。

喪服の事

喪服の事

喪服とは、すべて忌服の中、着する衣服をいふ。荒き麻布にして、黒みたる鼠色に染めたるを以て造るなり。これ喪中は悲哀の情を表して、衣服も常に異なるを用ひ、埋棺の日より、毎日其跡を吊ひて、詣づる外は、他事をつし、しみ人と交際せざる爲なり。かぎりあれば、今日ぬぎすてつふぢ衣。

はてなきものは涙なりけり

と、こは小野小町の姉、喪にこもりて、悲哀の涙、いまだ盡きざるに、いつしか忌服も終りて、喪服をぬぎ、常の衣服に改めて、涙ははてなき事ぞと、なげきてよまれしなりといふ。實に此歌の心の如く、あらまほしき事なり。ふぢ衣とは、藤色などにあらず、荒々しき麓末の喪服をさしていふなり。



公のつとめある人など、やむを得ず忌服中に出で、其職を奉ずる事ありとも、公事の外は、すべて此心得あるべきことなり。

忌明の禮

忌明の禮

忌明には、親族知己其外へも、すべて吊間を受けし方へ禮に行くことは勿論なれども、又風俗によれば、會葬者あまりに多くして、これに一々答禮し難き場所には、端書を用ひ、又は新聞紙に廣告するも、差支なし。  
又吊間の人より進物ありし方へは、白餅を贈る事あり、あるひは饅頭のたぐひを用ふるもあり、又地方によりては茶を以て答禮とする事あり。何れも土地の風俗習慣に従ひてよし。

遺物の事

遺物の事

忌明の後、其亡者の遺物を、近き親族へ贈ることあり。衣服なれば、廣蓋などに袖疊みにして、下がへを上になし、袖を折返さずしてのせてよし。但し下へ敷く紙は一枚とす。  
掛物其外、箱入の物は、其儘臺又は小蓋に据ゑ、又硯其他の小さな品は、紙一枚にて包みてよし。  
右何れも、遺物を贈るに添ふる熨斗包は、白紙にて折り、昆布を中へ挟むべし。  
水引は黑白にして、引結び、先を切るべからず。又老の波などかけざるものとす。

忌服日數の事

忌服日數の事

喪中の時限に忌と服とあり、忌中は猥りに他人に面會し、或は外出するを謹むべく、服中は神事などに遠慮すべし。其日數

は親疎しんそに随したがひて差ちがひあり服忌ふくき令しんの定さだむる所ところは左ひだりの如ごとし。

親戚等級	忌	服	親戚等級	忌	服
父 母	五 十日	十三 月	子 男	二 十日	九 十日
祖 父 母	三 十日	百 五十 日	同 女	十 日	三 十日
養 父 母	二 十日	百 五十 日	孫 男	十 日	三 十日
繼 父 母	二 十日	三 十日	同 女	三 日	七 日
曾 祖 父 母	二 十日	九 十日	曾 孫	三 日	七 日
高 祖 父 母	二 十日	三 十日	玄 孫	三 日	七 日
伯 父 母	二 十日	九 十日	甥	三 日	七 日
伯 叔 父 母	二 十日	九 十日	姪	三 日	七 日
兄 弟 姉 妹	二 十日	九 十日	從 兄 弟 姉 妹	三 日	七 日
兄 弟 姉 妹	十 日	三 十日	甥 姪	半 日	減 日
夫	三 十日	十 三 月	從 兄 弟 姉 妹	半 日	減 日
妻	二 十日	九 十日	七 歲 未 滿	〇	〇

### 附 録

以上述ぶる所の外、歌茶香などの會かいの式しきあり、何れもその專せん門もんの科かに屬ぞくするものなれども、是これはた禮らいに外ほかならねば、今いま附録ふろくとして、其一斑ひとまだらを左ひだりにもものせん。

#### 歌會の心得

世よに歌うたを和歌わがといふは、其初はつめ唐詩たうしに對たいしていひ始めし事ことなれば、只ただ歌うたといふをよしとす。

又また歌會うたかいといふ事も、中古ちゆうこより始まりしものなり。そも、歌うたは喜よろこ怒ど哀あは樂らくの折々せせに、おのが思おもふことを、うたひ出いづるものなれば、殊こと更に人ひとと圓居まるいして、歌うたよむにも及およばざるなり。とある書かきにあれば、又また世よの風俗ふうぞくには從したががはざるべからず。左ひだりに其作法そのさくぽうをあげて、

歌會の心得

少女達の心得とす。

先づ歌會をなすには、左の如き役別を定めざるべからず。

一 點者

これを判者ともいふ。會日一座の人々の歌のよしあしを評して、添削する役なり。

一 詠吟

披講ともいふ。會日人々の兼題及び當座の歌どもをよみあぐる役なり。

一 助吟

披講の時詠吟の人の側に坐し居て、助くる役なり。

一 行事

會日定まりて、各人へ題を遣はし、會場及び時間などを通知し、會席の諸事を取持ちする役なり。故に充分物なれたる人をえらぶべし。

一 給仕

若年の人、二三人、これは會場の末席に扣へ居て、諸人の用を達し、給仕する役なり。

會日兼題の歌は、懷紙にかくを本儀とす。但し場合により、行事より、兼て短冊と定めあらば、其規に従ふべし。何れも、あまり麗

末なる紙は用ふべからず。又猥りに侈るべからず。

會日、其席上の床には、人麁の尊畫又は歌などの掛物をかけ、其前に、文臺及び香花などの裝飾をなし、棚の上には、重硯など置くべし。

當日出會の人は、定め時間に於れざる様に来り、何れも休息所に控へ居るべし。

さて行事の人出で、會の席へ案内す。此時點者を始め、一統會釋して、席に入り、順次座につくべし。

時宜を見計らひ、上座の人より次禮して、一人宛立ちて床前に至りて坐し、一拜して、膝行して進み、懷紙を懷中より出し、左手を添へ、又右手にて、文臺の左の方へのせ、又膝行して退き、一拜して立上り、上座へ巡りて退き、元の座につくべし。次の人々何

れも右に同じくしてよし。但し懐紙の載せ様は、上座の人、左の方へ置く。次の人は順次、右の方へ及ぼすべし。

但し懐紙をよき程に巻き、其はしを少し折りて、懐中へいれて進むべし。

右終りて、行事の人、進み出で、床前に至り、坐して一拜し、膝行して進み、文臺を両手に持ちて立入るべし。かくて次の間に至り、助吟の人と共に、披講すべき様、順を整して、文臺にのせ、又持出で、程よき場所におきて退くべし。

稍ありて、詠吟、助吟共に進みて、文臺置きたる場所に坐し、助吟は文臺の上なる懐紙をとりて、我左の方に置き、一枚宛取りて、文臺の上へのするなり。

詠吟は、助吟の文臺にのする、懐紙の歌をよみあぐべし。但し貴

人及び點者の歌は、聲をたかくして二度繰返してよみ、おのが歌は聲を低くするを法とす。

一座の人々は、詠吟又貴人點者の歌を披講する時は、會釋すべし。又おのが歌の時も會釋する容をすべし。

披講終りて、又當座の式あり。行事の人、短冊に題をかき、硯蓋にのせて、巻頭の人の前に持行くべし。さて此硯蓋を神前へ置き、一人づゝ順次立ちて進み、神前へ會釋して立ちかへるべし。次に給仕の人、料紙及び硯箱を持出で、これを席頭の人の前に置くなり。

席頭の人、硯箱一面をとりて、次々へ送り、料紙は中を二枚とりて、これも次へ送るべし。

何れも料紙をとり、二つに折り、當座の題と名とをかき、硯箱の

下へはさみて置くべし。

此料紙二枚のうち一枚は草紙となし、一枚には清書をなし、  
て、點者の添削を乞ふ爲なり。

一、統歌を案ずる間は、相互に談話を禁ず。又おのれのみ早く詠  
艸出來たるも、人より先に出すは無禮なり。時宜を計りて、點者  
の評を乞ひ、然る後、これを短冊に認め、行事の檢閲をうけ、神前  
へ供ふるものとす。

右終りて後、行事出で、神前に至り、前の如くして硯蓋を持ち、  
次の間へ退き、又順を整す事、及びすべて披講の作法前の如し。  
かくて短冊を硯蓋にのせ、二人共に神前を拜して、詠吟の人よ  
り退く順なり。

次に行事出で、硯蓋を神前へ進め、一拜して退き、夫より饗應

に及ぶことなり。

畧式には當座の歌をよみあげぬ事もあり。其作法は當座の  
式終りて後、兼題を披講す。

又當座題に二種あり。そは數人に一題と、又一人毎に違ひた  
るとなり。一人一題なる時は、撚り題といひて、紙を撚りて出  
すなり。

歌會の饗は、なるべく手がるくして、風流なる食物をえらぶ  
べし。又一種物などいひて、參會の人、各々一種宛持ち來る事  
もあれど、こは極めて畧したる事と知るべし。

茶會の心得

茶會の心得

茶の湯會席の作法は、容易ならずして、此卷にかき添へ得べき  
ものにあらずといへども、少女達の茶會に招かれたる時など

甚だしき耻なからむ爲、其心得のみをこそそぎてかゝぐ。  
茶會も其日を定め、四五日前に招待状を送りて、客の來無を定むべし。

會日は室内は勿論、露地門の内、外何れも掃除し、室内は床に掛物をかけ、冬なれば爐、夏は風爐に、種火をいれ、釜をかけ、水屋の飴り、及び扣へ釜に湯を沸し、露地又門の内、外は、水をうちおくべし。

客は、其定め時刻におくれざる様に來りて、休息所にて客を待合はすべし。但し外に待合ある時は、待合に入りてよし。  
客一統揃ひたる時、主人方より露地へ巡るべきよし案内あり、一統用意して露地へ入り、待合にて主人の迎ひを待つべし。  
主人露地より迎ひに出で、程よき場所に立ちて一禮あり。此時

客一統立ちて、上客は四五歩、其他の客も之に順じて、進みて答禮し、又待合に腰をかけてよし。時宜を見計らひ、上客次禮して、立ちて進む。二三の客又同じく之に従ひて進む。最後の客これを詰といふ。詰の人又立ちて、上客其他の圓座を重ね、待合の片隅へよせ、蓑盆を其上へ置きて、又進むこと上客の如し。さて上客は、露地を歩みて茶室の前に至り、手水鉢のあたりにて蹲踞ひ、口を濯ぎ、手を洗ひて、茶室の躡り口の踏石の上に躡踞ひ、戸を開きて内に入り、下駄又は草履を、踏石の後へ寄せかけ、床前に至り、掛物を拜見し、次に爐又は風爐釜を見て、假座につく。次々客、皆右の如くして内に入り、上客へ會釋して、床前へ進み、掛物及び爐又は風爐釜を見て、假坐する事前に同じ詰の人内に入り、躡り口の戸を閉ぢ、又床前に進む。右終りて、順次座につ

くべし。

主人出で、禮あり、上客より順次時候の挨拶及當日招待の禮終りて、上客は掛物露地などの挨拶あるべし。主人時宜を見計らひ、立ちて水屋に入り、炭籠を持ち出で、炭の手前あり。香をたく時、上客より香合を拜見せむことを乞ひて、禮すべし。主人は香合を出し、炭籠を持ちて、勝手へ行く。此時上客香合を取りて、次禮し、香合を拜見して、次へ送る。順次拜見終りて、詰の人より、香合を上客へ返す。上客又進みて、これを受取り、又見直して元の所へ返し置くなり。

主人出で、釜の蓋を切り、香合を引く。此時上客より、香合につき、質問などありて、禮をなすべし。

主人、會席膳を持ち出で、上客及び順次に薦む。此時客は膳を兩手

にて受取り、會釋して下に置きてよし。時宜見計らひ、一統飯碗の蓋をとり、次に汁碗の蓋をとり、膳の右に置く。但し飯碗の蓋の上へ、汁碗の蓋を伏せて置くべし。食ひ様隨意たるべし。

すべて主人の薦めらるゝ食物は、會釋して之を受け、煮物は膳の右側に置くを法とす。酒を薦められれば、一度はこれをうけ、盃は膳の上におくなり。再三酒を薦めれば、銚子を任せられん事を乞ひてよし。

飯の替りを薦めれば、又飯鉢を任せられん事を乞ひ、時宜を見合せ、上客より順次飯鉢を、左膝の上に左手にて持ち、右手に杓子を持ち、飯を随意に碗に盛り、手送りにして、詰の方に叩へ置くべし。汁の替りは、碗の蓋をして出すものなり。焼物を惣鉢又は重に入れたる時は、上客又任せられんことを乞ひ、主人退き

て後、又之を順次にとり、詰の方に器物を叩へおくものとす。但し焼物は煮物椀の蓋にとり、香の物は向皿の隅に置くべし。すべて茶事會席は、食品を食ひ残さぬを作法とす。故に普通の食儀にかはりて、何品もなるべく食く終へ、煮物の椀は懷紙を出して拭ひおくべし。主人吸物を持出で、之を薦めて、煮物椀のあきたるを引く。此時又會釋あるべし。主人銚子八寸(取肴を盛りたる)を持出で、酒を薦め、取肴を挟みて、之を薦むる時、吸物椀の蓋を出して受けてよし。再三酒を薦めて、主人より盃を乞ふ。此時上客は盃を懷紙にてぬぐひて、主人へさす。次客銚子を取りて酌をすべし。其次の客又かくの如くして、順次詰の人へ及び、又上客へ薦めて引くなり。次に湯桶を持出で、吸物を引く。又上客より順次湯を椀にうつ

し、湯漬を食ひ終へ、又湯をうつして、次々へ送り、詰の方に控へおく事前に同じ。一統湯にて箸を洗ひ、湯を飲み終へ、懷紙を出し、椀及び箸其外をよく拭ひて、膳に箸を納むべし。主人出で、禮あり、一統禮を行ひ、膳を引き、次に菓子の器を持出で、上客の前へ薦め、主人は中立の事をのべて退く。客又次禮して、菓子の器を順次取り、菓子の器を食ひ、扱其器は重ねて、通ひ口の方に置くべし。かくて又上客より順次、床前に進み、始めの如く、掛物次に爐又は風爐釜を見直し、又上客より躡り口を出で、待合に行き、休息して主人の合圖を待つべし。主人の報あらば、報は鉦をうつか、又は主人自ら迎ふ。又始の如く上客より順次、口濯き、手洗ひて、茶席に入り、前の如く床前に至り、活花を見て、又爐か風爐の前に行き、水指及び茶入の飭あ



るを見て順次初座の如く座につくものとす。  
主人出で、濃茶の點前あり。杓引きたる時、客一統禮すべし。主人茶を點て、出ず。上客座を進みて、茶碗及帛紗を取りて、元の座につき、茶碗帛紗を上客の方へ出して禮する時、客は總禮なり。上客茶碗帛紗を取り、帛紗を左手の上にて開き、其上へ茶碗をのせて茶を戴き、二巡しして茶を飲む。此時主人より禮あり。茶碗持ちながら答禮して、又二口飲み、茶碗を下に置き、帛紗を疊みて、之も下におき、茶碗の呑口を懷紙にて拭ひ、また茶碗を取りて左の手にのせ、二巡しして、次へ送る。帛紗は茶碗に双べてよし。一統茶を飲み終へ、詰の人より上客へ茶碗帛紗をかへす。此時上客は帛紗を上座の方にとめ置き、次禮して茶碗を拜見して順次に送る。帛紗もこれに同じ。詰見終へて又上客へ返

す。此時上客進みて受取り、見直して主人へ返すこと香合に同じ。主人茶碗を引き、點前に置かれたる時、客一統總禮なり。主人手前終り釜に水をさし、水指の蓋をなす。此時上客より三器を拜見せむことを乞ふ。三器とは茶入、茶杓袋をいふ。主人之を出して退く。上客又進みて之を引き、上座の方にとめ置くものとす。主人通ひ口の戸を閉ぢて後ち、上客は茶入を取りて次禮し、之を拜見して送る。茶杓又これに同じ。詰の人拜見終りて、又上客へ返す。上客進みて之を受取り、又見直して元の位置におくものとす。但し主人の出せし時の反對に双べてよし。主人出でて三器を引く時、上客より相當の挨拶あるものなり。右終りて、主人は又炭を直し、釜に水をさし、暫しありて、干菓子を持出で、薄茶を點つるを法とす。但し後の炭には香合を拜見

せず。薄茶は一人一杯宛なれば、順次菓子を取次禮して取り、茶碗を引きて、我前に置き、主人へ一禮して飲むべし。

但し薄茶も主人の杓引きたる時、總禮なり。茶碗は香口を持ちながら、指にて拭ひ、其儘體を低くして、拜見してかへすなり。

菓子には主人の茶杓を持ちたる頃、次禮して取りてよし。

右終りて時宜見計らひ、主人へいとまを乞ひ、其日の饗を謝して、又床前にて活花を見直し、露地へ立出づるを常とす。

右は茶會の客の心得を簡短にのべて参考としたるものなれば、主人の手前の事を記さず。そも茶の事につきての作法は頗る事多くして、素人の容易に知り得べきことにあらずるなり。

平常茶席  
に入るに  
得る時  
の心

平常茶席に入りたる時の心得

茶席に入りては、先づ上席の方へ會釋して、其儘床前へ進み、靜かに坐して掛物及び活花を拜見し、床を拜して、上座へ巡りて立ち退きて元の座に着くべし。然る後、主人を始め、一座へ禮するを例とす。さて禮終りて、談話に移らざる前、掛物活花の事につき、主人へ挨拶あるべし。

又人の茶を點て居る中程に、其席へ入りたる時は、靜かに上席へ會釋して、末座に扣へ居り、手前の人退きて後前にのべたる如くして禮するものなり。

又人の點前中は、談話すべからず。もし、やみがたき事あらば、靜かにいふべし。

すべて點前中は、葺を吸ふべからず。又暑き節にても扇子など

つかふべからず。  
茶席はすべて猥りなる雑談を禁ず。又人の點前中に、故なく其席を立つべからず。

其他は畧す。右は素人の心得となるべき事のみをあげたるものなり。

香會の心得

香會の心得

すべて香には種々の作法ありて、其手前にも差あるものなり。昔は上つかたの行ひ給ひしものなれど、近頃は稍廢れたるが如くなりて、其道具だに知らぬ人多くなりたりと雖も、まれには古風を好む人もあれば、もしさる人の方へ招かれたる時、心得置くべき事のみあげて左にしるす。

そも香の作法の數は十種、香宇治山香、小鳥香、小草香、源氏香、花

月香、競馬香、名所香、矢數香、十炷香などなり。今爰にかゝぐるは、普通の香の心得と知るべし。  
香會の日を定め、四五日前に通知をなし、客の來否を定め置くべし。

室内には相當の裝飾をなし、床の下座又は棚の下に香棚を置き、亂れ箱、香具、火斗、疊紙、文臺、硯箱、料紙、取揃へ置き、門の内、外其他を清潔にして、水を打ちおくべきなり。

客は定めの間より十分計り早く來着し、各々休息所に入り、待ち合すべし。

主人出で禮終り、設けの席へ案内す。此時上客、次客へ會釋して立ち、次客又此の如くし、順次立ちて席に入る。其歩み様何れも香のつなり。かくて一統座につきて、主人を待つべし。

主人出で、棚の上なる火斗疊紙を持ちて、勝手へ退く。暫しありて、又持ち出で、火斗疊を下に置き、又棚の上なる亂れ箱を持つ。此時文臺の人出で、一禮し、主人と共に双びて、棚の上なる文臺を持ちて退き、主人の退くと向ひ合ひて、又客の方へ向き、又下座の方へ向きて、各々規則に従ひて座につくなり。主人香爐に火をいけ、香の手前を始む。客一統談話などすべからず。主人試みの香爐を上客の前へ出す。此時上客は次禮して香爐を取りて左の手にのせ、聞筋を巡して、靜かに聞終へ、次客へ送る時、又聞筋に心得あるべし。次客何れも此の如くす。右終る頃、文臺の人より札箱を出す。上客又次禮してこれをとり、次へ送る。各自我右の方へ札を出してうつむけて置くなり。さて試みの香は何れも一二三と言ひて、主人より出す。右終りて本

香出づ。此時主人より、折すゑを添へて送る。上客又次禮して、これを聞きて次へ送り、見込みの札をいれて、又折すゑを次へ送るなり。いく度も右に同じくしてよし。

香終りて、文臺の人、記録を持ち來りて、上客の手に渡し、一禮して退く。上客又次客へ會釋して、これを拜見して次へ送る。順なり。

右終りて、主客總禮、先づ主人立つ。次に文臺の人立ちて退く。客一統又順次始の如くして、席を立ちて退くものなり。香の記録は、聞當の人之を持ちて歸るものなり。

右は只客となりての心得のみなれば、主人の手前及び文臺の作法を記さず。又香會にも、右の式終りて、相當の饗あるものなり。但し其調

理は、事そぎて優なるをよしとす。又香會に招かれては、普通の宴會の如くすべからず、貞靜にして禮儀をあつくすべきものなり。

正誤

新撰女禮鑑序第五頁第二行中の

「講案なればとて」は「講案なり」の誤

新撰女禮鑑終

明治三十一年八月廿八日印刷  
明治三十一年九月一日發行

定價金五拾錢

著者 田邊和氣子

東京市麹町區平河町六丁目廿五番地

發行者 柏原文太郎

東京市芝區露月町十四番地

印刷者 佐久間衡治

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所 丁酉社

芝區露月町十四番地



79  
160

79  
160

版權  
所有

明治三十一年八月廿八日印刷  
明治三十一年九月一日發行

新撰 女禮鑑 終

新撰女禮鑑 附錄 香會の心得  
理は、事そぎて優なるをよしとす。又香會に招かれては、普通の宴會の如くすべからず、貞靜にして禮儀をあつくすべきものなり。

三二二

定價金五拾錢

著者 田邊和氣子

東京市麹町區平河町六丁目廿五番地

發行者 柏原文太郎

東京市芝區露月町十四番地

印刷者 佐久間衡治

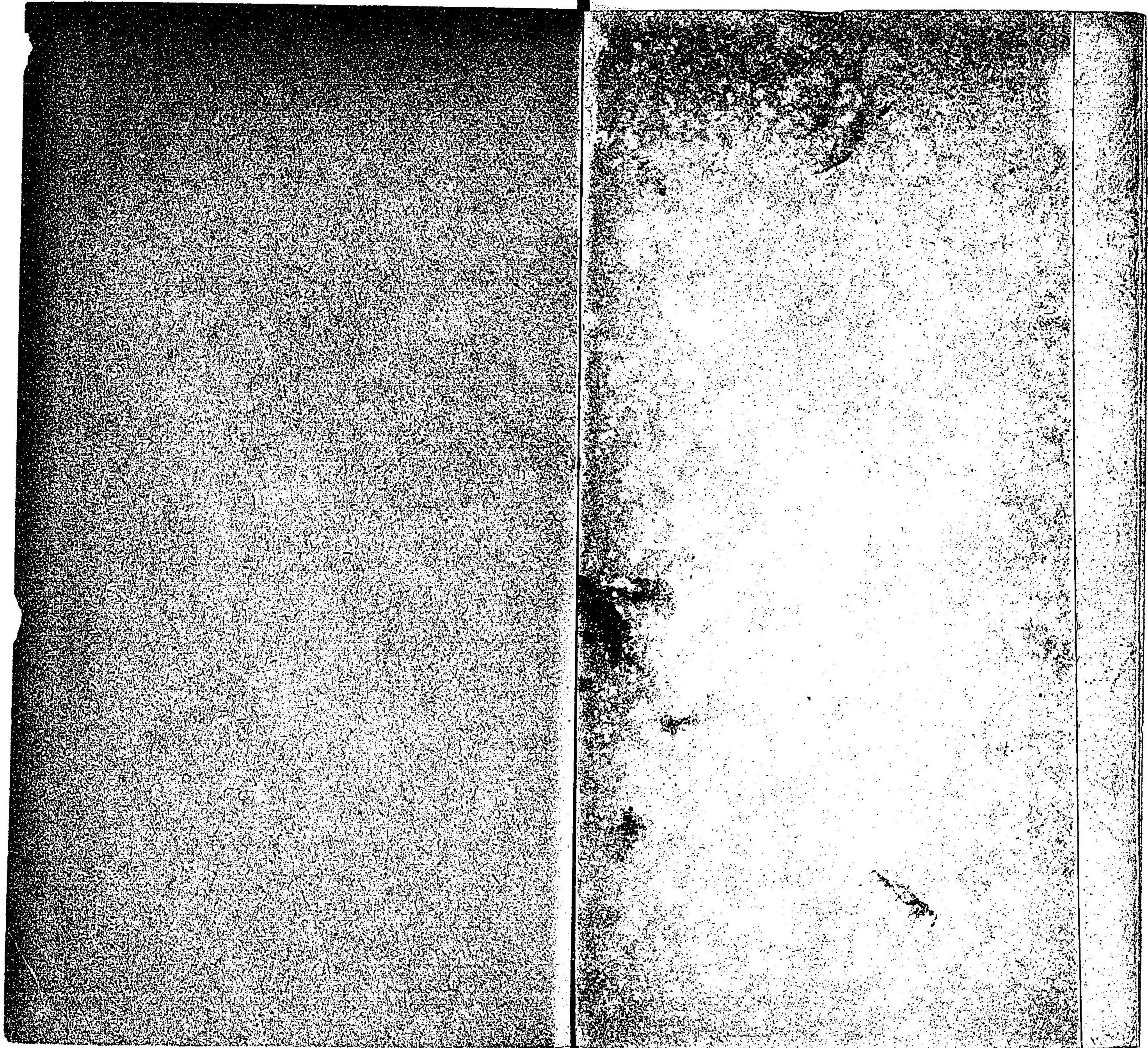
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發行所 丁酉社

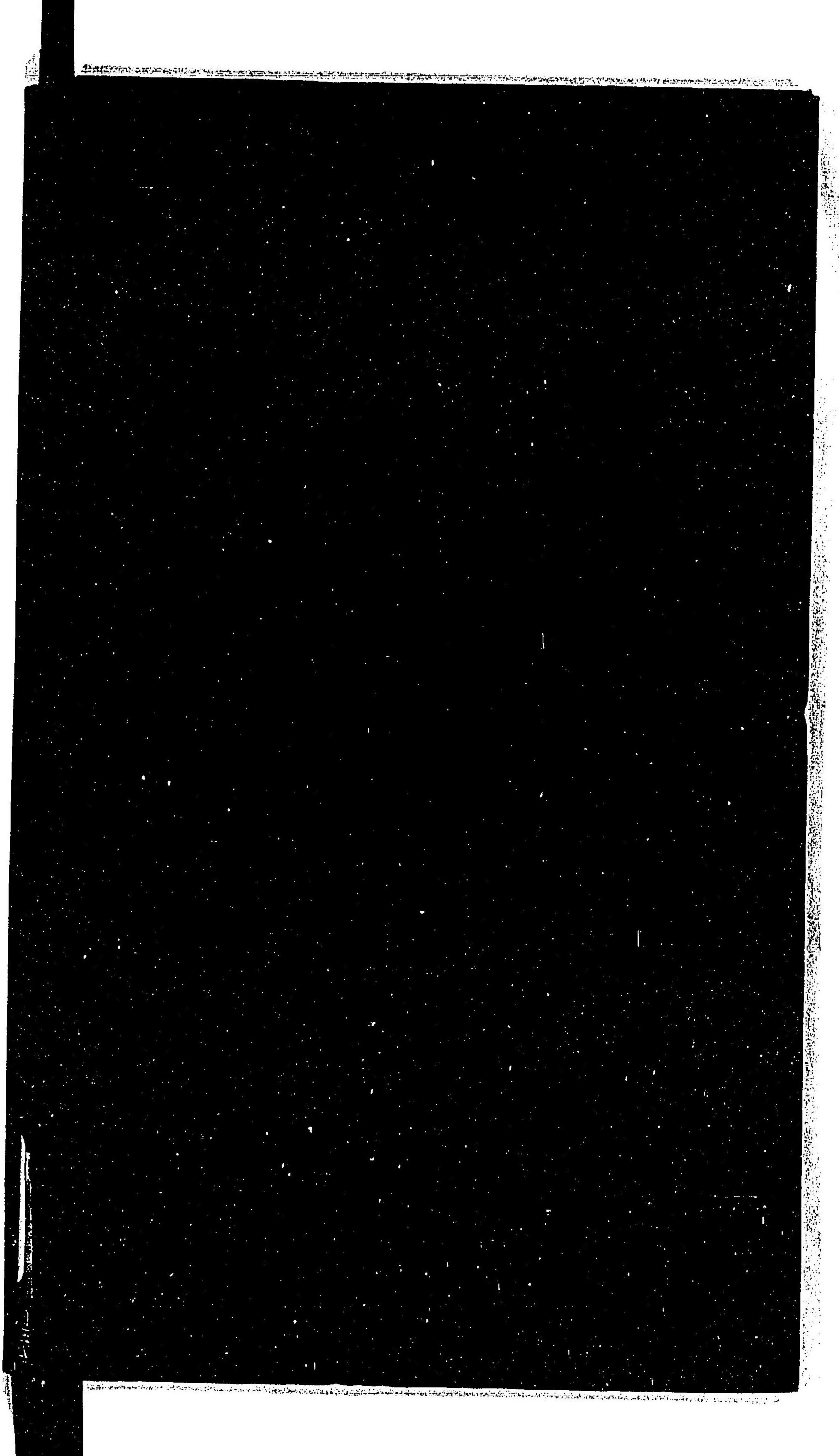
芝區露月町十四番地



79

160





012065-000-7

79-160

女礼鑑(新撰)

田辺 和氣子/著

M31

AAG-0123



